

幼稚園教育指導資料第2集

家庭との連携を図るために

平成4年7月

文 部 省

ま え が き

幼稚園での幼児の生活は、家庭などでの生活を基盤とするものであり、これらと切り離して考えることはできません。このようなことから、幼稚園教育においては、従来から家庭との連携の重要性が強調されております。更に、近年の社会の著しい変化は、家庭の教育機能にも様々な影響を及ぼしていることが指摘されています。加えて、本年9月から学校週5日制が導入されようとしている現在、幼稚園と家庭との連携の在り方について改めて見直してみることが大切と考えます。

本書は、幼稚園と家庭とが連携して相互の教育機能を高め合いながら、幼児の発達を促していくための基本的な考え方や方法などについて、実践事例を取り上げて解説するものです。

各幼稚園においては、本書を手掛かりに日々の実践を工夫され、家庭との連携を通じて幼児の充実した生活を実現されることを望んでやみません。

本書の編集に終始熱心に御協力いただいた幼稚園教育指導資料作成協力者の各位に、ここに深く感謝の意を表する次第であります。

平成4年7月

文部省初等中等教育局幼稚園課長

塩 谷 幾 雄

目 次

プロローグ	4
第1章 家庭との連携を図るための基本的な考え方	7
1. 幼児を中心に据えて	8
2. 幼児の生活を充実したものに	9
(1)幼児期とは	9
(2)幼稚園と家庭の役割	10
3. 相互理解を図りながら	12
(1)幼児の育つ姿を通して	12
(2)幼児のための連携を	13
(3)多様な価値観を受け止める	14
(4)相手の立場に立って	14
(5)園の教育方針の共通理解を図る	16
第2章 実際に連携を進めるために	17
1. 幼児の生活する姿からのはじまり	18
(1)いろいろな機会を捉えて	18
(2)幼児の内面を理解する	19
(3)幼児の気持ちを家庭と一緒に受け止める	22
(4)幼稚園での様子を家庭に伝える	24
(5)幼児の成長やよい面などを伝える	25
2. 相互理解を深める	27
(1)保護者の思いをくみ取る	27

(2)不満や苦情を前向きに受け止める	29
(3)幼稚園教育の在り方を伝える	30
3. 幼稚園全体で取り組む	32
(1)教師間の信頼関係を大切にする	32
(2)教師の役割分担を考える	33
4. 家庭と子育ての楽しさを共有する	35
(1)心のつながりから協力へ	35
(2)理解を深め合うことで	36
(3)幼児の生活する姿にもどって	38
(4)子育ての楽しさをともに	39
(5)保護者同士の広がりへ	40
5. 地域への広がり	42
(1)地域を大切に	42
(2)地域の幼児教育センター的な役割を担う	43
第3章 よりよい連携を実現するための事例	49
事例1 ――「お日さま」大好き――	50
事例2 ――家族みんなの登園日――	52
事例3 ――あせらなくても大丈夫――	56
事例4 ――川も田んぼも保育室――	58
事例5 ――楽しい声がいっぱい――	60

プロローグ

入園以来、毎朝のように登園をしぶり、母親にしがみついて泣くA子をめぐって、教師や家族の心配には大きいものがありました。何とかなだめて保育室に誘い入れても、他の幼児のように楽しく遊ぶ様子は見られず、黙って見ていることが多々ありました。

担任のS教師は、A子が安心して幼稚園で過ごせるようになるには、保育の工夫と同時に、自分がA子の母親ともっと心の通い合う関係になることが必要ではないかと考え、登降園時のわずかな時間を利用して、できるだけ自分の方から話しかけるようにしてみました。毎日の会話の積み重ねの中から、A子の母親は仕事をもっていること、昼間の育児は祖母に頼っていることなどが分かりました。また、幼稚園でのA子の状態が心配で、母親自身が落ち着かない気持ちでいることも次第に分かってきました。

母親が心配するのは当然ですが、その心配がA子の不安感を一層募らせているのかもしれないとS教師は思いました。S教師が母親の心配を受け止めているうちに、母親自身の心の中に「何とかしなければ」という気持ちが芽生えてきたようです。「明日からA子と一緒に弁当作りをしてみようかと思います。」ある日、母親はこんな決心をS教師に打ち明けました。仕事をもちながら、忙しい朝の時間を子供と一緒に手間のかかる作業に費やすことは、大変な努力を要することです。しかし、母親は何とかA子と触れ合い、毎朝の登園前の時間を楽しいものにして、A子の心の安定を図ろうとしたのではないのでしょうか。S教師はその愛情に感心するとともに、その気持ちが何とかA子に伝わるようにと祈らずにはいられない気持ちでした。

朝の台所に大小の弁当箱が並びます。母親と一緒に弁当を詰めながら、A子は母親の温かい心を感じ取っていったようです。毎日嬉しそうに弁当を見せてくれるA子の姿を見ているうちに、S教師は自分ももっとA子に温かく接するように心掛けようと思いました。

次第に明るくなってみんなの中に溶け込んでいくA子の姿を母親にも伝えたくて、S教師は心を込めて連絡帳に書き続けました。

母親とS教師の心のつながりの中で、A子の世界が次第に広がっていきました。

幼稚園の教師であれば誰しも家庭との連携が大切であることを認めるでしょう。しかし、「家庭との連携」というと、幼稚園が保護者をいかに啓発するか、あるいは園の運営にどう協力してもらうかといった面にのみ目を向けがちではないでしょうか。家庭と連携するとは、この事例のように幼稚園と家庭がお互いの立場や生活などを理解し合い、心のつながりを生みだして、幼児のために力を合わせていくことなのです。そのためには、教師や幼稚園の側も家庭とともに学び合いながら、保育の在り方や連携に対する姿勢を常に見直し、改善していくことが求められるのです。

この指導資料は、幼稚園と家庭が心のつながりに支えられた連携を図るために理解しておきたいことについて述べるものです。

なお、この資料ではいくつもの事例やエピソードを紹介していますが、あくまでもそれぞれの幼稚園や家庭の実情から生まれた事例ですので、それらがどの幼稚園にもそのまま当てはまるものではありません。それぞれの幼稚園においては、この資料を手掛かりとして、実情に沿ったよりよい連携の方法を探り、一人一人の幼児が幼稚園においても家庭においても楽しく充実した生活を送れるような実践を展開することが期待されます。



第1章

家庭との連携を図るための 基本的な考え方

幼児期には、家族の愛情に包まれた家庭での生活と教師や同年代の友達と過ごす幼稚園での生活の両方が必要です。

幼稚園教育指導書は「幼児の家庭や地域での生活経験が幼稚園において教師や他の幼児と生活する中で更に豊かなものとなり、幼稚園生活で培われたものが家庭や地域社会での生活に生かされているという循環の中で幼児の望ましい発達を図られていく」と述べています。

幼稚園と家庭は一人一人の幼児の発達を促すため、どのように連携を進めていけばよいでしょうか。この章では、連携を図る際の基本的な考え方について述べることにします。



1. 幼児を中心に据えて

幼稚園においては、一人一人の幼児が安定した情緒の下で十分に自己を発揮し、幼児期にふさわしい生活が展開できるようにすることが求められています。幼稚園が家庭との連携を図るのは、あくまでも一人一人の幼児にこのような生活を実現するためです。一方、家庭にとっても幼児はかけがえのない大切な存在であり、我が子をいとおしく思わない親はいないのです。

その大切な一人一人の幼児を中心に据えて、幼稚園と家庭が力を合わせ、幼児の生活を充実したものにし、その発達を促していくことが連携の本質なのです。

それぞれの幼稚園では、家庭との連携を図るため様々な実践を行っています。個々の幼児の生活に対するお互いの理解を深めるために、父母会、保育参観、家庭訪問などがよく行われており、また、幼稚園の行事を幼児にとって思い出深いものにしたたり、日常的に幼児が充実した活動を展開できるような保育環境を作り出したりするための協力を家庭に求めることも多くあります。

いずれの場合も、「幼児の生活を充実させるために何が役立つか」、「幼児の発達にとってどうすることがよいか」など、幼児を中心に据えて考えることが大切になってきます。

しかし、現実には、慣例に流されて一方的な連絡になったり、表面的な出来映えにとらわれて家庭に過度な負担を与えたり、幼児不在の連携になっていることもあります。また、熱意のあまり、保護者の気持ちも考えずに教師が一方的に問題点を指摘したり、協力を求めたりするために、保護者が不信感をもつようになり、かえって幼児が不安になるというような結果を招く場合もみられます。

家庭との連携に当たっては、家庭の協力を必要とする具体的な一つ一つの事柄について、それが幼児の発達にどのような意味をもつのかを幼稚園と家庭が一緒に考え合うことが必要です。そのことによって、保護者と教師との間に同じ幼児を大切に思う者同士としての信頼関係が築かれ、心のつながりが生まれてきます。この心のつながりこそが、幼稚園と家庭との連携の大きな推進力となり、また望ましい連携を実現する基盤となるのです。

2. 幼児の生活を充実したものに

(1) 幼児期とは

人間の発達を考えると重要なことは、人生のそれぞれの時期にふさわしい経験をその時期に十分に積み重ねることです。幼稚園教育要領においても、幼稚園は「環境を通して」教育を行う場であり、遊びを中心とした幼児期にふさわしい生活が展開される場であることが示されています。教師は、幼児期の発達の特性を十分に理解し、それに基づいて実際の教育を進めていくことになります。また、保護者にも幼児期の特性や生活の中で学ぶことの大切さを伝えていくことが期待されているのです。

「先生、まだ文字や数を教えてくれないのですか?」「先生、幼稚園は遊んでばかりで大丈夫なのではないですか?」などの質問にとまどった経験は多くの教師がもっているでしょう。

確かに、幼児は何かを教えたり、訓練したりすれば、大人が期待するように覚えてやりこなしてしまうので、それがあたかも才能を伸ばしたり効率よく発達を促したかのように見えてしまうことがあります。保護者としては、我が子に小学校以上で学習するような知識・技能を早く身に付けて欲しいと期待することは無理からぬことかもしれません。そのため、特定の知識や技能を早くから身に付けるための専門的な指導を受けたいなど、幼稚園に対して誤った期待を抱く保護者もみられます。

しかし、このような保護者の気持ちがあったとしても、教師はあくまで幼児の望ましい発達のため、幼稚園教育の在り方を見失わないように対応していくことが求められるのです。人間の生涯にわたる発達という観点から幼児期の



第1章 家庭との連携を図る基本的な考え方

過ごし方を捉えてみると、このような外見上の発達をいくら急いでも、その時期に必要な経験が十分になされていないと、後の人間形成に大きな問題を残す可能性があることが指摘されています。例えば、幼児期に興味や関心を無視して知識・技能を教えこまれることが小学校に入ってからの子供の学習意欲を損なうことにつながったり、幼児期に友達との触れ合いを十分に経験する機会を得られなかったことが思春期になってから人間関係の上で様々な問題を引き起こす場合もあることは、多くの事例が物語っています。

それでは、人間の生涯にわたる発達という観点から、幼児期に最も大切にしなければならないことは何でしょうか。幼児期には、生活の中での様々な経験を通して、生涯にわたる発達の基盤となる次のような能力や態度を十分に獲得できるようにしなければなりません。

(ア) 自ら興味や関心を抱いた活動に十分に取り組むことを通して、自分で考えたり創意工夫できるようになる。

(イ) 大人への依存を基盤として失敗したり試行錯誤したりしながら成功感や充実感を体験することにより、自分に対する自信や期待をもち、次第に自立へと向かっていく。

(ウ) 具体的な生活経験を手掛かりに、自分なりのイメージを形成し、それに基づいて物事を受け止めるようになる。

(エ) 友達とかかわる中で次第に相手の気持ちが分かるようになり、自己の発揮と抑制のバランスをとれるようになる。

それぞれの幼稚園では、このことについての教師間の共通理解をもう一度確認しておきたいものです。

(2) 幼稚園と家庭の役割

幼稚園と家庭は、幼児の発達にとってどのような意味をもつのでしょうか。

幼稚園は幼児にとって、教師との信頼関係を基盤にしながら、遊びを中心として友達と楽しく集団生活を送る場です。そのような充実した集団生活を展開することにより、幼児は生涯にわたる心身の健やかな発達の基礎となる様々な力を培っていくのです。

2. 幼児の生活を充実したものに

一方、家庭は、家族から十分な愛情や思いやりを受けて安心して過ごせる心の基地なのです。幼児は依存し安心して過ごせる家庭生活を通して、愛情や思いやりの大切さ、生活していく上で必要とされる基本的な生活習慣などを自然に身に付け、精神的にもまた生活習慣の上でも次第に自立へと向かっていきます。

このように、幼稚園と家庭は双方とも幼児の発達にとって重要な役割を担っており、それぞれが十分にその機能を発揮することが大事であることはいうまでもありません。

ところが、家庭は様々な事情によりその機能が十分に発揮できない場合もあります。そこで、幼稚園側はそのような家庭の事情をよく理解し、それに応じてそれぞれの家庭との連携の方法を考えていく必要があります。

大事なことは、それぞれの役割を区分けして、相手にそれを果たすよう要求することではなく、お互いの立場を理解し合い、それぞれが自分の機能を発揮できるように相互に支え合う関係を生み出していくことです。それによってどの幼児にも幼児期にふさわしい充実した生活が実現していくのです。



3. 相互理解を図りながら

「お母さん、とってもいいことがあったんだよ。〇〇くんが、洋服のボタンを全部一人ではめられたんだよ。」迎えに行った私の姿を見つけた時のY男の第一声である。我が子が先生から褒められることばかりを期待していた自分が親として恥ずかしくなった。友達の出来事を喜んで知らせる我が子の成長した姿に、学級の温かさ、担任の先生の日頃の温かい御指導が感じられた。

(1) 幼児の育つ姿を通して

幼稚園と家庭の心のつながりは、一人一人の幼児の育つ姿に触れ、喜びを分かち合うことを通してより強められるものです。

現在は子育てや幼児教育についての情報があふれています。そうした情報に揺り動かされ、子育てに自信をもてなくなり、あせりを感じている保護者も多いようです。幼稚園は、保護者が安定した気持ちで幼児の成長を温かく見守っていけるよう、支えていくことが求められています。そのためには、幼稚園生活の中で成長していく一人一人の幼児の姿を保護者に具体的に伝えることが大切です。幼稚園の中で幼児が楽しく充実した生活をしている姿を知って、保護者は幼稚園を信頼し、安心することができます。また、自分の子どもの成長する姿から、幼児期の発達において本当に大事なことは何かを自然に理解することができるでしょう。更に、我が子の成長を見て子育ての楽しさや喜びを味わうことは、子供を育てる者としての意欲をもつことにもつながるでしょう。幼児の育つ姿は、どんな言葉より説得力があるのです。

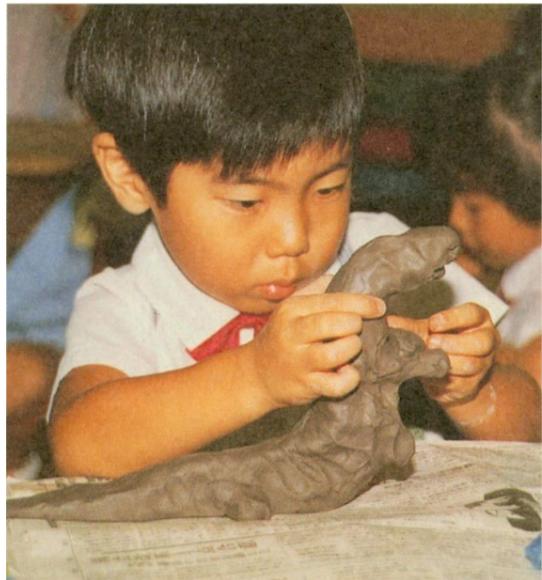
教師についても同じことが言えます。それぞれの家庭での子供の成長に改めて気付いたとき、本当に嬉しく、報われた思いがして、教師としての新たな意欲が湧いてくるでしょう。教師は、子供の成長を共に喜ぶ者として、家庭での幼児の姿にもっと触れるよう努めていきたいものです。

幼稚園と家庭が一人一人の幼児の成長する姿を共に喜びながら、その幼児のために何をどのようにすることが大切かを一緒に考えていくことによって、心のつながりに

支えられた信頼関係が築かれ、具体的な連携の内容や方法が生み出されていくのです。

(2) 幼児のための連携を

先にも述べたように、幼稚園が家庭と連携を図るのは、あくまでも一人一人の幼児のためです。家庭との連携は、幼児のためにより充実した生活を実現することが最終的な目的です。連携のための特別な行事や啓発活動を先に考えるより、日々の園生活の中にいくらかでもある日常的なことを連携の機会として大事にすることを心掛けたいものです。



例えば、保護者に園の行事に参加してもらおうときも、このような連携の本来の目的を曖昧なままにして取り組むと、思わぬ結果をもたらすこともあります。保護者にも積極的に参加してもらおうと考え、保護者にいろいろ作ってもらったり、練習のために幼稚園に来てもらったりしたのですが、そのことが家庭に過度な負担をかけてしまい、かえって家庭生活を乱して、子供に悪い影響を及ぼさなかったというような事例もみられます。家庭にはそれぞれの生活や事情があり、幼稚園のために何かすることを楽しみにしている家庭もあれば、協力したくてもできない家庭もあります。協力できない家庭はともすると引け目を感じ、幼稚園に不熱心な家庭と思われるのではないかという心配を抱くこともあります。教師はそれぞれの家庭の事情を理解しておきたいものです。幼稚園は、行事などに協力してくれる家庭も協力できない家庭も、どちらも大切に考えていることをいろいろな機会に姿勢として示す必要があるでしょう。熱心で協力的な家庭より、協力したくてもできない家庭の方がより切実に幼稚園との連携を必要としているのかもしれませんが。

家庭との連携にどんなに高い目標を掲げても、それが幼児の生活を充実したものに

第1章 家庭との連携を図る基本的な考え方

せず、かえって負担を強いることになるようならば、本末転倒です。

家庭との連携については、常に幼児の生活する姿から出発して、幼児の生活をより充実させることに戻って考えることを忘れないようにしたいものです。

(3) 多様な価値観を受け止める

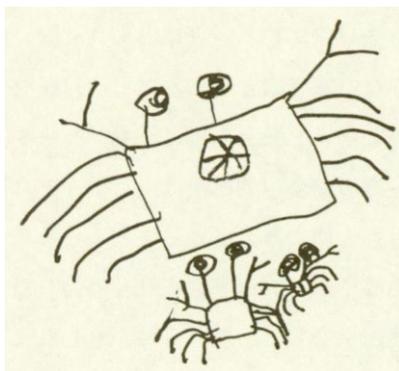
現代は価値観が多様化しており、家庭や親も様々です。そのため、家庭や親の教育観や育児観は必ずしも幼稚園側の方針と一致するとは限らないのです。そのような場合、「あの家庭の考え方は問題がある。」と考えるしてしまう教師もいるかもしれません。しかし、幼児を理解するときと同様、家庭を理解する上でも、その家庭の問題点をとらえるより、家族の気持ちやなぜそうなったかを理解することの方が重要です。家庭の様々な事情や考えをよく聞き、理解することによって、教師もまた成長することができるのです。教師は、保護者を指導するというのではなく、まずその考えを十分に聞くという謙虚な気持ちを持ち、ともに学び合い、育ち合っていくよう努めたいものです。

家庭の考えを聞きながら連携を進めていくのは、時間と手間のかかる作業です。幼稚園側の考え方で一方的に進める方が簡単で煩わしくないと思えるかもしれませんが。しかし、それでは本当の連携は図れないのです。一方的に与えてばかりいると、保護者は内心では納得できないままに、本音を隠し、表面だけで教師に対応するようになります。

先にも述べたように子供のために思わない保護者はいないのだから、長い目で見れば、同じ幼児のために考える教師と気持ちが通じないはずはないのです。お互いの考えや思いを出し合うことにより、相手を理解し、信頼関係を築くことが必ずできるでしょう。

(4) 相手の立場に立って

幼稚園と家庭との連携は、これま



3. 相互理解を図りながら

でも述べてきたとおり、まず相互に理解を深め合うことが大切です。

しかし、その際に留意しなければならないことは、教師と保護者では、ものの見方や受け取り方が違うということです。教師にとっては当たり前と考えられることでも、保護者にとっては理解できなかつたり全く違った受け止め方をすることがあります。そこで、保護者からどう受け取られるかを考え、相手の立場に立って話し合い、連携を図るよう心掛けましょう。

例えば、まだ入園したばかりの時期に「うちの子供は、どうしてみんなと一緒に遊べないのかしら？」と心配する保護者がいることがあります。入園したばかりの幼児が、初めての集団生活への緊張などからすぐに遊びださなかつたり、他の幼児と一緒に行動しなかつたりすることは、教師の立場から見れば毎年繰り返される姿であり、当然のことと思われるかもしれませんが、しかし、我が子の姿を通して初めて幼稚園の生活に触れる保護者としては、心配する方がむしろ自然ではないでしょうか。このような場合に教師が「それは無理ですよ。」とストレートに言ってしまつたり、「大丈夫ですよ、そのうち遊べるようになりますよ。」と軽く片付けてしまうと、保護者は自分の子供が教師に大切にされていないのではないかと、あるいは自分の心配が教師に伝わらなかつたのではないかと考えてしまうことにもなるのです。幼児にとって幼稚園に入園することは家庭から離れて集団生活に入る第一歩なのです。保護者も幼児と同じように幼稚園という未知の場や教師に対しての期待と不安で緊張感を味わっていると思われれます。我が子を安心して幼稚園に託すことができるよう保護者の気持ちを受け止めて、その心に届くような対応をすることが必要です。「Aちゃんは今日はBちゃんと一緒に楽しそうにしていましたよ。幼稚園に慣れてくれば、もっとお友達ができるようになりますよ。」というように保育の中の具体的な場面を交えて、丁寧に話をすれば、保護者には教師が自分の子供をよく見てくれていることが伝わり安心させることができるのではないのでしょうか。

幼稚園と家庭との連携を図るためには、日常的な触れ合いと同時に、保育参観、学級懇談、個人面接、園だより、連絡ノートなど様々な方法が考えられます。どの場合にも、保護者の立場に立って考えるといった配慮が必要です。保護者の立場を尊重した話し方や記述の仕方についての配慮をする一方、相手が聞きたいこと、知りたいことを分かりやすく、楽しく伝えようとする姿勢などをもちたいものです。

(5) 園の教育方針の共通理解を図る

幼稚園教育を進めるためには、幼稚園がそれぞれの家庭の育児方針を理解するよう努めなければならないのと同様に、いろいろな機会に幼稚園の教育方針や教育課程を家庭に理解してもらうように努めることが大切になります。

幼稚園の教育方針を保護者に本当に理解してもらうには、ただ理念を言葉で説明するだけでなく、それが実際の日々の園生活の中でどのように実現されているかを具体的に分かってもらうことが大事です。また、どのような説明も、日頃の信頼関係や、幼児が生き生きと成長しているという保護者の実感の裏付けがあってこそ、本当に心から理解してもらえるのです。

そのためには、教師間で教育方針を共通理解しておくことが前提となります。教師それぞれの個性や持ち味を大事にしながら、幼稚園全体として、園の教育方針が実現されるよう、日頃から話し合い、お互いに力を合わせて進めていく姿勢をもつようにしたいものです。教師間にこの共通理解があれば、言い方や説明の仕方は異なっても、目指していることや大事にしていることは皆同じであることが保護者にも理解されます。それが幼稚園の目指す方向に対する理解を生み出し、それぞれの教師に対する信頼感にもつながってくるのです。



第2章

実際に連携を進めるために

幼稚園と家庭との連携とは、第1章に述べたように幼稚園と家庭が幼児の生活を充実させるために協力することです。そのためには一人一人の幼児を中心に据えて考えるとともに、幼稚園と家庭が相互に理解し合わなければなりません。

この章では、その基本を踏まえ、実際に幼稚園と家庭が連携を進めていくために必要な事項について述べることにします。

(1)では、幼児のための連携は幼児の生活する姿から出発しなければならないという観点から、幼児の内面を理解し、その気持ちを家庭に伝え、家庭と一緒に受け止めるときに配慮すべき事項について述べます。

(2)では、家庭との相互理解を深めるために、まず教師が保護者の思いをくみ取り、その気持ちに十分に配慮するべきであることと、そのための留意点について述べます。

(3)では、連携に当たっては、教師間の信頼関係を大切にし、幼稚園全体で取り組む必要があることについて述べます。

(4)では、幼稚園が家庭の協力を得て、家庭と子育ての楽しさを共有するための様々な取組みの実際や留意点について述べます。

そして、最後の(5)では、幼稚園が家庭との連携を進めていくためには地域の人々の信頼が必要であること、家庭との連携を一步進めて地域の幼児教育センター的な役割を果たすことが期待されていることについて述べます。

1. 幼児の生活する姿からの始まり

(1) いろいろな機会を捉えて

連携するとは、教師と保護者が幼児のより充実した生活を実現するために力を合わせていくことです。

そのような連携は、毎日の幼稚園生活の中で出会ういろいろな出来事を捉えて、それを連携を図る機会にしていくことが双方にとって自然であり、しかも力強い推進力を生み出すこととなります。実際に、日常の出来事の中には連携を必要とするものが多くあります。例えば、幼児の気付いたことやできたこと、嬉しいことや行き詰まっていること、寂しさや不安などを保護者に伝えることが、家庭での幼児の生活によい影響をもたらすきっかけとなることがあります。また、保護者から出された質問や心配などをきっかけにして、教師と保護者が心を合わせて幼児のことを考えていくこともよくあることです。

教師は日常の幼稚園生活で出会ういろいろな機会を捉えて、それを連携の出発点として生かしていくよう努めたいものです。

また、教師が何らかの場や機会を設けて、意図的に連携を求めていくこともあります。保護者と個別に話し合う機会としては、家庭訪問や個人面談などがあるし、何か連絡したいことが起きたときに教師側から保護者に電話をすることもあります。また、全員に知っておいてもらいたいことやみんなで話し合うことが望まれるときには、保護者会など多数の保護者を対象にする集団的な場を設けることがあります。さらに保育参観や様々な園行事などのように、実際に幼児の活動する姿に触れながら、考え合う機会をもつこともあります。しかし、このような集団的な場は、どうしても幼稚園や教師の思いを一方向的に伝えることになりがちであり、形式的に保護者に話してもらう時間を設けたからといって、すぐに本音を聞き出すことができるとは限らないことも心に留めておきましょう。

どのような機会においても、幼稚園が一人一人の子供を大事にし、また保護者一人一人の気持ちを大切に作る姿勢を忘れないようにしたいものです。

(2) 幼児の内面を理解する

幼稚園生活の様々な機会を捉えて家庭との連携を図るためには、教師が幼児の思いを受け止めてこれを家庭に伝えていくことが必要です。すなわち、日々の保育において教師が幼児の言葉や行動からその思いや気持ち、期待など、内面を理解していくことが第一歩となります。

幼児はその時々思いを幼稚園生活の様々な場面で表現しています。一人一人が送ってくるその幼児らしいサインを次のような視点から丁寧に受け止めてかかわることにより、その内面に触れることができるでしょう。

○ 幼児は身体で表現する

幼児は自分の気持ちや思いを言葉で表現するとは限りません。いろいろな思いはあっても、それを伝える言葉がまだうまく使えない幼児も多くいます。また、言葉を知っていても、いざというときにうまく表現できなくなることもあります。



幼児は表情や動きといった身体全体で表現しています。言葉で十分に伝えられないことを身体で表現しているのです。極端な場合には、幼児の思いが発熱や腹痛というような身体症状となって表れてくることもあります。幼児の表情や動きは瞬間的なものであり、その意味を理解することは必ずしも容易ではありません。

しかし教師としては、身体全体で幼児に触れることにより、その思いや気持ちを感じ取っていかこうとする姿勢をもちたいものです。それが幼児の内面を理解する出発点になるのです。

○ ちょっとした動きに目をとめて

例えば、登園時の様子に目をとめて見ましょう。保護者に手を引かれて仕方なく入

第2章 実際に連携を進めるために

ってくる幼児は、家庭で何かあったのかもしれません。元気のない幼児は、園生活に何か不安があるのかもしれません。また部屋に入るなり教師に駆け寄って話しかけたり、何かを見せてくれる幼児は、何か伝えたいことがあるのでしょうか。

同じことは降園するときの様子にもいえます。すぐに飛び出していく幼児は、園生活の中で何か保護者に伝えたいことがあったのかもしれません。帰りたがらない幼児は、まだやりたいことがあるのかもしれません。教師の手を引いて保護者のところに連れていく幼児は、伝えたいことがまだ十分に表現できないためなののでしょうか。登降園時の幼児たちの様子には、幼児の様々な思いがあふれています。

このような、生活の中のちょっとした動きに目をとめて、幼児の気持ちを読み取ろうとすることが大切なのです。

○ 幼児の表情に目をとめて

幼児の内面の動きは、その表情によく表れます。遊びの場面でも、幼児の表情にその内面を理解する手掛かりを求めたいものです。

例えば、同じく遊びの中には入ってなくても、他の子供たちがしていることを目を輝かせてじっと見つめているようであれば、それを自分でもしてみたいのかもしれません。友達から離れて園庭の片隅で一人でポツンとしている幼児の表情から、寂しい思いを読み取ることができる場合もあります。「先生、おうちに帰りたいの。」と訴えてくる幼児の表情が明るさを失っていないことから、本当に帰りたいのではなくて教師にかまって欲しいのだという幼児の思いをくみ取ったという事例もあります。

○ プロセスをよく見る

描いたり作ったりする活動などの時には、活動の結果からだけでなく、そのプロセスに幼児の内面が表現されていることに留意しなければなりません。

例えば、描きながらつぶやいている言葉やどんな苦心を



1. 幼児の生活する姿からのほじまり

重ねてきたかを丁寧に追ってみると、作品に込められた幼児の思いに触れることができます。また作品を教師や保護者に見せたがる幼児もいれば、見せたがらない幼児もいます。どこを誰に見せたいのか、どうして見せたがらないのか、そうしたことも幼児の思いの表現として捉えることができるのです。

○ 一緒に行動してみる

外側から幼児の行動を眺めているだけでは、幼児の内面をくみ取ることは困難です。教師も幼児と同じ行動をとってみたり、遊びの仲間に入ってみたりすることで、心の動きが伝わってくるのがよくあります。

○ 会話やつぶやきをよく聞いて

幼児は嬉しいことや楽しいことがあると、すぐに自分からそのことを教師や保護者に伝えてきます。その伝え方はいろいろで、すぐに話してくれるときもあれば、そっと内緒話で伝えてくれることもあります。ときには「先生、いいこと知りたい？」と教師に尋ねてほしいと催促してくることもあります。

更に、教師がみんなに話しかけたり質問したときに、それに答えて自分の思いや考えを表現してくることもあります。そうした一人一人の表現を丁寧に聞いていくことにより、幼児の気持ちや思いを知ることができるのです。

また友達との会話やつぶやきから幼児の気持ちが分かることがあります。友達との何気ない会話やつぶやきなども幼児の内面の表れとして大切にしていきたいものです。

○ 様々な可能性を考えて

幼児の気持ちや思いなどを完全に理解することは、誰にもできないことかもしれません。大事なことは、身体全体で幼児にかかわり、本当の気持ちにできるだけ近づこうとする姿勢をもち続けることです。ある一つの行動や言葉にも、いろいろな意味が考えられます。活動の過程や周囲の状況から、こんな思いだろうか、〇〇のためだろうかなど、いろいろ考えてみたいものです。幼児の気持ちを一方的に決め付けたりせずに、幼児に触れながらその気持ちに少しでも近づいていきたいものです。

(3) 幼児の気持ちを家庭と一緒に受け止める

「家に帰ると幼稚園の話を楽しそうにするのですが、どうして幼稚園では何もしないのでしょうか。毎日よく言って聞かせるのですが……。」

M子の母親は心配でたまらない様子で担任に訴えてきた。M子は入園当初から口をきかず部屋の隅にじっと立ったまま過ごすことが多い幼児である。

担任は、黙って立ったままのM子が他の幼児の遊ぶ様子を目で追っていることや登園をいやがらないことなどから、M子のこのような状態は、はじめての集団生活に對するとまどいの現れではないかと受け止めていた。そして、母親にもこのことを伝え、家庭でもあせらずにM子の話を十分に聞いてあげて欲しいと頼んだ。

この事例は、話さないという事象の裏に秘められた子供の気持ちを教師が理解し、家庭と一緒にあって、その気持ちを受け止め、時間をかけて子供の生活の充実を図っていった例です。幼児に何らかの問題と思われる行動があったときも、その原因を家庭のせいにして、その解決を保護者に押し付けてはいけません。まずは教師としてできることを実践してみせ、それを手掛かりにして共に考えていこうという姿勢をもつことの大切さが示されています。

毎日の園生活における幼児の生活する姿の中から一人一人の幼児の気持ちや思いを読み取っていくうちに、そのまま放置しておくことのできない様々な問題が表れてくることがあります。この事例のように、むしろ保護者の方が心配で困っているようなこともあるし、逆に保護者が問題に気付かないでいる場合もあります。教師は幼児とともに生活する中で、幼児の姿からその気持ちや思いに気づき、それを家庭と共有するよう努めなければなりません。

幼児の気持ちの中でも、次のようなものは見逃さず、家庭と連携して適切に受け止めるようにしたいものです。

○ 幼稚園への不安

新入園児は多かれ少なかれ幼稚園に不安を抱いているものですが、幼稚園の生活の途中でもいろいろなことがきっかけになり、失敗を恐れたり、友達を怖がるなど、不安を感じるようになることがあります。担任が変わったときや行事に取り組むときな

1. 幼児の生活する姿からの始まり

ども、このような状態が生じることがあります。その気持ちを幼児は、登園を嫌がる、泣くなどの直接的な行動で表すこともあるし、元気がない、ぐずぐずしている、友達の中に入ろうとしないなどの小さなサインとして表現することもあります。

教師は幼児のこのような不安をできるだけ早く受け止めて、対応していきたいものです。

○ 注目して欲しい

幼児はどんなときにも、自分に注目をして欲しいという気持ちをもっています。教師が他の幼児に関心を奪われているときや、親や家族が何かで忙しかったり追われていたりして余裕がなく、自分に目が向かなくなったときに、幼児は様々な行動でその気持ちを表します。

登園を渋る、教師と離れられなくなる、わざと突飛な行動や乱暴な行動に走る、ひどいときには度々おもらしをするなどの行動の中には、幼児の不満が背景になっているものもあります。したがって、このような行動を一概に否定的にとらえず、その背景にある不満を理解していきたいものです。



○ 自分でやりたい

幼児は、3歳から4歳へと向かう過程で、自立したいという気持ちが育ってきます。例えば、あまりうまくできないことでも自分一人でやろうとしてじれたり、他人に手を出されると怒ったりすることがあります。そのようなときは、自分でやりたいという子供の気持ちを尊重して、ゆっくりと見守る姿勢が大切です。

○ 認めて欲しい

幼児は幼稚園生活の中で、日々、新しい経験をしています。その経験を通して成長

第2章 実際に連携を進めるために

し、それまで自分の力ではできなかったことが、次々にできるようになっていきます。その時の幼児の喜びは限りなく大きいものといえるでしょう。大好きな教師や保護者に対して、自分の成長する姿を認めて欲しいと願うのも当然です。自分のできるようになったことを周囲の状況におかまいなく何度も繰り返したり、自分の作ったり書いたりしたのを見てほしいとせがむことがあります。「先生見て見て!」「ママ見て見て!」と言ってきたときには、まずはこれを認め、一緒に喜ぶことによって、成長への期待と自信をもたせていきたいものです。

(4) 幼稚園での様子を家庭に伝える

ある朝、N子がよく育った二十日大根二つと母親の手紙を大事そうに持って登園してきた。その手紙には母親の字で、これが母親とN子が一緒に育てた二十日大根であり、N子が毎日先生やお友達に分けてあげたいと楽しみに水をやっていたことが書かれていた。

初めは二十日大根を届けてきた意味がよく分からなかった教師が思い返してみると、1か月ほど前に幼稚園で作った二十日大根をみんなに一つずつ分けて持ち帰ったことが思い出された。幼稚園での生活する様子が、たった一つの二十日大根を通して家庭に伝えられ、家庭でも親子で二十日大根を育てるという楽しみを生み出していたのだった。

幼稚園生活を送っていると、このようなささやかなエピソードによく出会います。保護者は、我が子の幼稚園での様子を常に知りたがっています。幼稚園で今どのようなことをしており、それが幼児のどのような成長につながっていくのかを知りたいと思うのは保護者として自然な気持ちです。



1. 幼児の生活する姿からのほじまり

幼稚園は、このような保護者の願いや思いを大切にしていかなければなりません。日常の教師と保護者との会話やクラスだよりなどはこのために大きな役割を果たしているのです。また、保護者にちょっとした連絡や協力を依頼するときなどにも、幼稚園での幼児の生活している様子を具体的に伝えるよう心掛けることが望まれます。

例えば、単に「明日、牛乳パックを持ってきてください。」と伝えるよりも、「このごろ幼稚園で子どもたちが水遊びを楽しんでいます。今度、みんなで大きな舟を作り、プールに浮かべてみようということになりました。もし、御家庭に空いた牛乳パックがありましたら持ってきてください。」と伝える方が、親にとっては牛乳パックがなぜ必要であるかが分かるだけでなく、幼稚園での今の幼児の様子が具体的に分かってよいでしょう。そのことを通じて家族の会話が広がったり、お風呂でもいろいろなものを浮かばせて親子で遊んでみるなど、幼児の生活が一層広がることも期待できるのです。

(5) 幼児の成長やよい面などを伝える

T男の待ちに待った誕生日。T男は朝からそわそわしている。さて、誕生会の始まり。T男は緊張した面持ちで背筋を伸ばして立った。クラスの友達から「おめでとう。」と手作りのプレゼントを渡され顔を赤らめている。教師が、「何歳になりましたか？」と尋ねると、T男は「5歳になりました。」とはっきり答えてくれる。どちらかといえば引っ込み思案で、みんなの前で表現することがあまり得意でなかったT男の堂々たる姿である。

翌日、お弁当の時に、いつも残していた卵焼きを全部食べ、嬉しそうに見せにきた。教師が褒めると「もう5歳だから。」と得意そうに言った。

その月の学級懇談会で、T男の成長した姿を話題の一つに取り上げると、母親も「家でも何でも食べると張り切っています。あれほど好き嫌いの激しかった子がこのように成長してくれるとは思ってもみませんでした。」と嬉しそうに言っていた。

成長した我が子の姿を知り、母親は喜びを感じただけでなく、我が子の成長に対して自信を新たにしたに違いありません。成長した点やよい面を伝えてもらうことによってどれほど我が子をいとおしく思えることでしょうか。そのことが、育児への喜び

第2章 実際に連携を進めるために

と親としての自信につながっていくのです。それがさらに、家庭での幼児の生活の充実を実現することにもなるのです。

保護者には子どもの成長がなかなか見通せないことがあります。自分の期待がすぐにも実現しないと、あせりや失望を覚えがちです。教師は、専門家として幼児の日々の様子からその成長を捉え、それを保護者に具体的に伝えていく努力をしたいものです。そのためには、一人一人の幼児を丁寧に見て、今、幼児のどのような面が伸びつつあるのかを読み取っていききたいものです。他の教師の意見を聞いたり、記録を積み重ねるなどにより、成長を読み取る確かな目をもてるようにしたいものです。



2. 相互理解を深める

(1) 保護者の思いをくみ取る

家庭との連携を図る上で、保護者との触れ合いを通してその思いをくみ取ることの大切さは、繰り返し述べてきました。毎日の幼稚園生活を振り返ってみると、教師が保護者と触れ合う機会がかなり多いことに気付きます。登降園の際のちょっとした会話、電話での応対、個人面談、保護者会など、そんな時の何気ない言葉のやりとりを通して、保護者は教師に対して信頼を寄せたり、逆に反発を感じてしまったりします。

ここでは、日常の触れ合いを通して保護者の思いをくみ取り、心のつながりを生み出すためにどのようなことに配慮すればよいかを考えていきましょう。

○ 話をていねいに聞く

何よりも大切なことは、保護者の話をじっくりとよく聞くことです。保護者は、我が子が幼稚園でどんな生活を送っているのかを知りたいといつも思っています。また、幼稚園に対する自分の願いや思いを教師に伝えたいと願っています。しかし、教師の忙しそうな様子や他の保護者への心づかいから、なかなか教師に話しかけることができにくいこともあります。せっかくだと話しはじめたとしても、保護者が、その気持ちをストレートに表す場合ばかりではありません。何を伝えたいのか保護者自身にもはっきりしなかったり、遠慮して話したいことをそのまま言わなかったり、話の内容と保護者の気持ちの間にずれのあることも多いものです。感情的になったり、結論を急いだりせずに保護者の話を最後まで聞き、その思いをくみ取る努力をしたいものです。幼児の生活に何らかのトラブルが生じたり、保護者が幼稚園に何らかの不満を抱いたりといった場合には、なお一層このことが大切になります。教師が忙しそうにしたり、自分の考えにとらわれていたりしていると、保護者との心の距離はますます遠くなるでしょう。保護者が本当に求めているのは、単なる知識でも客観的な事実でも説得でもなく、教師の温かい共感なのかもしれません。

○ 時間をかけて

保護者との触れ合いを通して思いをくみ取ることは短期間でできることではありません

第2章 実際に連携を進めるために

せん。保護者が幼稚園に対して、不安や不満をもったり、子育てに悩んでいるときにはなおさらです。保護者の気持ちを大切に受け止めながら、折にふれて教師の方から「今日はこんなことがありました。」と報告したり、「○○ちゃん、このごろ家ではどんな様子ですか」と尋ねたりするなどして継続的に触れ合いを重ねていくことが大切です。

一日の中で起きた小さな出来事にも心を留めて保護者に伝えたり、話し合ったりすることで心がつながり、保護者の本当の気持ちに触れることができるようになります。一見、つまらないことのように思えることですが、教師のこのような努力が家庭との連携の中で一番大切なことであり、幼稚園教育に対する共通理解もこのような積み重ねから生まれてくるのです。

○ 幼児のよい面、伸びる可能性を中心に話し合う

教師は誰でも自分のものさしを基準にして幼児の行動を評価します。しかし、そのものさしが平均的な発達の姿ばかりを目安にしたものであったり、柔軟性のないものであったりすれば、その幼児の足りない点ばかりに目を向けることになってしまいます。そして、その幼児のために家庭でもらいたいことを伝える場合にも、問題点を指摘することにとどまる傾向がでてくるのです。どんなに幼児のためを思っていることであっても、その伝え方によっては保護者との心のつながりが失われてしまうことが少なくないことに留意しなければなりません。

私たちの心の中には、周囲から問題点のみを指摘されると、攻撃されていると感じて、自分を守るために相手を攻撃したり、弁解したり、他のせいにしたりする仕組みがあります。反対に、自分の存在や立場を認めてくれる相手の前では、本音が出せるし相手の言葉も素直に受け止めることができます。

幼児は保護者にとってかけがえのない存在です。幼児のよい面や伸びる可能性に視点を当て話し合



2. 相互理解を深める

うことで、それまでは気付かなかったような保護者の思いやよさなども理解できるようになるかもしれません。そのことによって、保護者も自分が理解されているという信頼感をもてるようになるものです。こうした相乗作用により、相互理解が図られていくことになるのです。

まず、教師が自分のものさしを見直し、保護者とともに幼児のよさを伸ばしていこうという気持ちをもつことが必要なのです。

(2) 不満や苦情を前向きに受け止める

幼稚園生活の中で、保護者は様々な形をとって自分の気持ちを伝えようとする。「うちの子が、最近よくAちゃんにいじめられたと言っているのですが、本当でしょうか。」とか、「このごろ朝になると、ぐずって登園を渋るのですが、何か園の方で変わったことはないでしょうか。」というように、登降園時に話しかけたり、連絡帳に書いてきたり、電話を使ったりして尋ねてくる場合があります。

このように伝えてくるまでに保護者なりに家庭で相談したり、悩んだりしていることが多いと思われます。言葉は短くても、その奥にはその何倍もの気持ちがあるかもしれないのです。

教師としては、それがどんなに思いがけないことであっても、あるいはその表現が強すぎると感じられても、不満や苦情をいやな出来事とせず、まず、その話を聞く姿勢をもちたいものです。その場で簡単に結論を出す必要はありません。むしろ「気を付けて様子を見てみます。」など誠実に対応していくことから信頼感が深まることも多くあります。その保護者の気持ちを心をつなげる第一歩と受け止めて、プラスの方向に向ける努力をしたいものです。

保護者が自分の気持ちを一番話しやすいのは、気の合った保護者同士です。そのため直接の当事者でない保護者から「〇〇さんがこんなことを言っていましたか。」というように、別の保護者の不安や不満などを聞くこともあります。その場合には、親同士の関係を損ねないように配慮することも大事です。

また、保護者は自分の思いを教頭や園長など担任以外の話しやすい教師に伝えることもあります。ときには他のクラスの教師に「先生のところはいいですね。うちのクラスは……」というような形で担任への不満を伝えてくる場合もあります。

第2章 実際に連携を進めるために

不満や苦情というものは、直接本人には伝えにくいものです。このような苦情にも誠実に対応するよう努めるならば、いずれは信頼関係を築くことができるものと前向きに受け止めたいものです。

園長室に記名あるいは無記名の苦情の投書が飛び込んでくることがあります。また、何人かの親の連名や保護者会の意見という形で苦情が出されることもあります。このような事態にも、目の前の出来事に振り回されることなく、その背景について教師間で冷静に話し合ったり、自分の保育を反省したりして適切に対処するようにしたいものです。対処の仕方次第で、以前よりもっと強い信頼関係が生まれることが期待できるのです。

(3) 幼稚園教育の在り方を伝える

毎日の保育の姿を通して、幼稚園教育の在り方を家庭に伝え、保護者とともに子供を見る目を確かなものへと成長させていくことが一番自然な連携の姿です。

しかし、保護者会などの特別な機会を設け、幼稚園の教育方針や姿勢、希望を家庭に伝えることもまた必要です。

保護者会は、ただ漫然と進めていたのでは、教師の意図することが十分に保護者に伝わっていないことが多いものです。確実に伝えようとすれば、様々な工夫が必要になります。

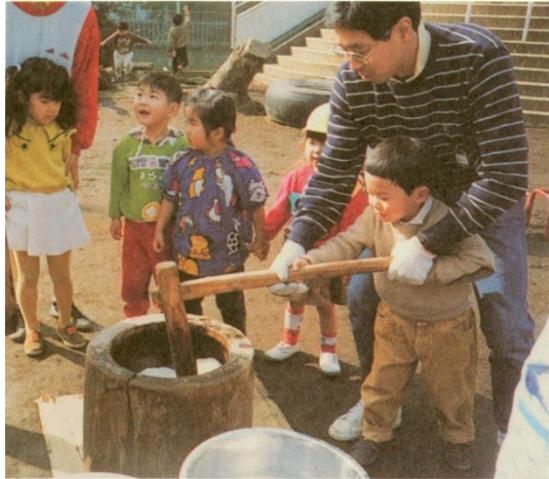
例えば、保護者が今、必要感をもっている問題を取り上げて、保護者同士の経験を伝え合ったり、修了児の親の経験を聞いたりする方が、教師に説明されるよりもずっと説得力をもつ場合があります。

また、多くの園で実施している保育参観は、子供の育つ姿を保護者に見てもらい、そのことを通じて幼稚園を理解してもらおうという意味で非常に有効な機会です。しかし、ただ漫然と行っているだけでは、多くの保護者は我が子のことばかり見ていて、教師が見て欲しいと願っている保育の流れにまで目を向けないことが多いものです。また、教師が子供の生き生きとした姿を見てもらおうと思っても、事前に見方を伝えていないと「おしゃべりが多い」、「まとまりがない」などとしてしか評価してもらえない場合もあります。

幼稚園に対する保護者の理解も幼児が集団生活に溶け込んでくるのと同じような道

2. 相互理解を深める

筋をたどって深まってくるものです。入園の当初には、保護者の関心は自分の子供が幼稚園生活にうまく入っていけるだろうかということに寄せられます。そのようなときは、参観で子供たちが元気に幼稚園生活を楽しんでいる様子を見てもらうことが効果的です。時間の経過とともに、自分の子供だけに向けられていた関心が次第に他の子供



にも向くようになります。また、幼稚園を理解したり、幼児の成長する姿を見たりすることによって、視野が広がってくるのが期待できます。保育参観の視点をそれに合わせて変えていくと、参観の効果が一層高くなります。その場合、参観の中で特に見てもらいたい観点をプリントなどで事前に保護者に伝える工夫をすることも大切です。幼児を見る目や幼稚園に対する協力もその中で深まってくるでしょう。

家庭に知って欲しいことをクラスだよりや園だよりに取り上げて伝えることが多くの園で行われています。家庭では、幼稚園の生活を理解する窓口として楽しみに待っていることが多いようです。このような通信では、クラスの中の出来事のうち、多くの幼児の家庭に知って欲しいことを取り上げていきたいものです。そのことにより自分の子供以外の子供たちの成長にも関心をもったり、目を向けられるようになったりすることでしょう。

そのほか、例えば、講演を聞くことなどが、保護者が子育てについて改めて考える機会になることが多いようです。講演会などを企画する場合には、今、保護者にとってどのような内容が求められているのかをいろいろな角度から検討することが望まれます。また講演会の後で、保護者が感じたことや考えたことを話し合う機会を設けたり、幼稚園として講演の内容をどう生かしていきたいかを伝えたりすることによって講演会を一層有効なものとする事ができるでしょう。

3. 幼稚園全体で取り組む

(1) 教師間の信頼関係を大切にする

幼稚園にはいろいろな個性をもった幼児がおり、その家庭も様々です。実際に家庭との連携を進めていこうとするときには、教師として予想もしないような問題に直面することもたくさんあります。悩みや相談、不満などの内容も幅が広く多様であり、担任が初めて直面するような問題もできます。また保護者同士の関係や家庭内の関係などが絡んだ複雑な問題に直面する場合があります。ときには一人の幼児のことでその家庭と連携を進めていくことが、他の家庭から反発されることさえあります。

このような問題に取り組むときには、担任一人に任せるのではなく、教師みんなが自分たちの問題として取り組んでいくことが望まれます。様々な目で見ることにより、幅広い視点から問題に取り組んでいけるのです。

また、教師も、保護者も人間ですから、その関係がいつもスムーズにいくとは限りません。保護者の方から見れば、「あの先生は話しやすい。」「担任の先生は分かってくれなかったが、別の先生は分かってくれた。」ということもありえます。だが教師間に協力関係があれば、そのようなこともそれぞれが聞き役と伝え役という役割分担により対応していくことができます。このような協力体制をつくるためには、日頃からの教師間の信頼関係が大切になります。信頼関係が築かれていなければ、お互いに支え合う体制は生み出せないものです。

教師間の信頼関係がしっかりしていないと、思わぬことで教師間の対立が生じ、保護者の幼稚園への信頼が失墜するような事態さえ起こりかねません。初めから十分な信頼関係を求めることは難しいでしょうが、教師間でいろいろ



3. 幼稚園全体で取り組む

な問題に取り組む中で次第に相互理解を図り、お互いに信頼感をもつようにしていきたいものです。このような努力を続けることによって、それぞれの教師が自分の立場から解決に協力するような、支え合う協力体制が築けるのです。

教職経験2年目のS教師は、A子への対応に悩んでいた。

A子は自分の欲求を相手に言葉でうまく伝えられないと、すぐに行動で示してしまうことが多い幼児である。友達と遊びたいのだが、ぶったり泣かせたりしてしまうことがよくあるので友達ができないという悪循環になってしまっている。S教師は、A子とどのようにかかわればよいかを園長に相談した。

そこで園長はS教師に、これまでのA子とのかかわりを事例にまとめて、次の園内研修で教師全員に相談してみることを勧めた。S教師はその会でA子との問題を中心に、日頃、保育で悩んでいることを他の学級の教師や園長にぶつけてみた。S教師のひたむきな姿勢に、他の教師もそれぞれの経験から意見を述べるなど話し合いが深まった。この話し合いの機会は、A子の問題を解決する手掛かりだけでなく、教師間の心のつながりを深めることにも役立ったようである。何かあったときにはS教師を支えるようにみんなで心がけることと同時に何か分からないことがあったら学年の教師間で気軽に相談し合うことを確認した。

クラスの幼児と直接にかかわるのは担任の役割ですが、園に通ってくる子は全教職員で見えていくことが基本的な姿勢として求められます。この事例のように、担任の経験が浅かったり、対応の難しい幼児がいて、担任だけではうまく保育できない場合には、特にその担任を全員で支えていくようにしたいものです。

そのためには、職員会議なども重要ですが、毎日の保育が終わった後にその日の出来事や子供のことで気になることなどを話題にし、教職員間で気軽に相談し合えるような雰囲気をつくるのが大切になります。このような話し合いにより、幼児のために教職員全体で取り組もうという気持ちがつくられていくのです。

(2) 教師の役割分担を考える

幼稚園の保育がうまく展開されていくためには、それぞれの教師が役割を果たして

第2章 実際に連携を進めるために

いくことが必要になります。担任は、日々のクラスの保育に当たる立場から、保護者との日常的な連絡に当たり、その信頼を得てよき相談相手となることが求められています。けれども幼稚園全体で取り組まなければならないような問題が生じたときには、むしろ園長や教頭などの出番となります。

園長等は、幼稚園全体の運営や安全に目を配り、教師が困っているときには相談にのり助言することが求められます。ときには幼稚園に対する苦情など難しい問題に適切に対応することもあります。また、行事や父母会あるいは園だよりなどを通して、保護者に園の教育方針を理解してもらえようとするのも園長などの役割です。教師が安心して家庭や地域との連携ができる雰囲気をつくりだすことや、教師相互の信頼関係を育むことも園長などの大事な仕事です。

なお、いうまでもないことですが、突発的な事故などが生じた場合には、周囲の教職員が臨機応変に協力することが必要となります。例えば、子供が急に具合が悪くなったり、けがをしたときなどは、担任はまず園長などに伝え、その指示によって教職員全員が、応急手当をする、保護者に連絡する、必要ならば病院に連れていく、その間、他の幼児を保育する、関係機関に連絡するといった様々なことを分担しながら進めていかなければなりません。

教師間の役割や責任の分担は、各幼稚園の体制や教職員構成などの実情によりその在り方が異なります。園長等が中心になって、実際の分担がうまくいくように、それぞれの幼稚園に適した体制をつくる必要があります。



4. 家庭と子育ての楽しさを共有する

(1) 心のつながりから協力へ

幼稚園と家庭が信頼関係で結ばれ、幼稚園教育の在り方についての理解が深まってくると、幼児の生き生きと活動する姿に触れたことなどをきっかけにして、幼稚園生活を充実させるため何か協力したいという申し出がなされることがあります。

遊園地のイメージからパレードごっこが流行した。遊びを発展させていくうち、幼児はドレスを着て踊りたいという思いを強くもつようになり、教師と一緒にいろいろな紙やひもを使ったドレスを作りはじめた。紙ではあるが、自分たちで作ったドレスということで、幼児たちのパレードごっこは盛り上がり、踊ったり、歌ったり、パレードに必要なものを作ったり、いろいろな活動に発展していった。担任はこの楽しい活動の様子を降園時に迎えにきた母親たちに伝えた。「家に余り布があるのですが……」C子の母親の申し出から何人かの母親たちが、家庭から余り布を持ち寄って幼児や教師と一緒に何着ものドレスを作ってくれた。母親の手作りの本物のドレスは、幼児の遊びをますます広げていったようである。このことをきっかけにして、家庭にある様々なものを遊びの材料にならないかと園に届けてくれるようになり、「捨てようと思うものでも遊びに使えないかなと見直すようになりました。」という嬉しい感想もきかれるようになった。

幼児の遊びは、どのような物や素材に出会えるかによって大きく変化していくものです。いつも同じものしかなかったり、使おうとしても十分なものがないのでは、幼児のイメージは発展せず、遊びも次第にマンネリ化しかねません。そのため、日々の保育においては、できるだけ多様な材料に出会えるように、常に環境を工夫することが求められています。これらの工夫や努力に当たって、家庭の協力を得られることは大きな意味をもちます。例えば、家庭にある空き缶、空き瓶、空き箱、残り布や毛糸などは、幼児にとって貴重な材料になりますし、地域にある廃材やダンボール箱なども材料として利用することができます。家庭に協力してもらうことにより多様な材料

第2章 実際に連携を進めるために

を集め保育の中で活用すれば、幼児の遊びをより豊かなものにすることができるでしょう。

また、保護者の中にはいろいろな職種の人やいろいろな特技をもっている人もいるので、材料探しや材料作りばかりでなく、幼稚園の環境の整備や幼児の遊びの指導者として協力してもらうこともできるかもしれません。

このように幼稚園は、家庭の人々の力を生かしていくことによって、幼児の環境をますます豊かにし、充実させていくことができるのです。

また、家庭の協力を得ることは幼稚園や幼児にとって貴重であるばかりでなく、協力する人々自身にとっても幼児のために行う楽しい体験となるでしょう。その体験が、保護者にとって幼児の生活を一層理解し、育児の喜びを知るよい機会となるよう配慮していきたいものです。同時に、幼稚園との協力を通して、保護者が子供との共通の話題をもてるようになり、幼児にとってもよい思い出となれば、協力は一層意味のあるものとなります。

(2) 理解を深め合うことで

園庭の片隅に池があったが深く危険なので、フェンスで囲んで入れないようにしていた。ある年、子供たちが「舟を浮かべるんだ。」「水遊びしよう。」と口々に話しながら池に入ろうとして、教師に止められるということがあった。それを見ていた保護者から、池を砂で浅くしてはどうかという提案があった。

幼稚園でも、職員会議で幼稚園の環境作りが話し合われたときに、この池を幼児の遊びに生かせるようにできないかという案が出されており、大変な作業になることは予想されたが、それでも幼児のためと保育終了後のわずかな時間を利用して、教職員全員で毎日少しずつ池の埋め立て作業をすることになった。しかし、作業は予想以上に難航した。

その作業を見た保護者から協力の申し出があった。みんなに声をかけて金曜日の午後をその作業に当てようというものである。安全管理のために埋め立て計画のことを園だよりで伝えてあったのを見ていた他の保護者も、快く応じてくれた。

スコップを持ち寄って、職員と保護者そして園児も一緒になってみんなで一日汗

4. 家庭と子育ての楽しさを共有する

を流し、危なくない浅い池に改良することができた。

幼児たちは次の日から、さっそく舟を浮かべたり、水遊びをしたりして、その池を活用するようになり、フェンスのなくなった池は今では幼稚園になくてはならない環境となっている。

幼稚園で子供たちと一緒に生活していると、こんなものがあつたら幼児の活動がもっと楽しく生き生きしてくるのにとすることがあります。例えば、この辺に大きな土の山があつたならとか、ランチルームや絵本のコーナーがあればとか、いろいろなものが環境として欲しくなります。幼稚園と家庭が、そうした環境



が幼児のためにどうして必要なかを共通に理解することが、協力を成功させるかぎです。この事例の幼稚園でも、教師間の話し合いの中で、水遊びの池の必要性やその環境によって幼児の遊びがどう発展するかの具体的な共通理解ができていました。また日頃からの連携の結果、保護者にも幼児の幼稚園での生活に対する理解や関心が高まっており、フェンスの周りの子供たちの気持ちも自然な形で保護者に理解されたのです。

幼稚園生活に対する理解が不足していると、保護者のせつかくの気持ちがよい方向に生かされません。保護者から協力の申し出があつた場合には、まずその気持ちを大事に受け止め感謝し、それが本当に幼児の生活にとって意味のあることかどうか、また、その内容が適当であるかなどを幼稚園としてよく考えてから受けるかどうかを判断することになります。協力を受けるかどうかは、あくまでも幼児の環境や生活を充実させるという視点から判断すべきです。

第2章 実際に連携を進めるために

(3) 幼児の生活する姿にもどって

数年前、幼稚園の菜園づくりが父母会の協力で実現した。その後も菜園の草取りなど保護者が交替で手伝ってくれることが続いていた。ところが年月がたつうちに「何で私たちがこんなことをやるのかしら」といった気持ちをもつ保護者が多くなって、思わぬ反発に幼稚園がとまどうことになった。はじめ菜園づくりに協力した保護者はその作業の意義を理解して、幼児のためならと張り切ってやってくれたのだが、年月とともに義務的なものになってしまったのである。そこで幼稚園では、幼児と保護者が一緒に野菜の収穫を楽しむ機会を設けたり、野菜づくりの計画を知らせるなどして、保護者にも新たな気持ちで、幼児のための菜園づくりの意義を理解してもらえる努力を重ねるようにした。

幼稚園にとっては毎年協力してもらっていることであっても、参加する保護者は毎年変わります。園としては恒例のことなので、何のために協力してもらうのか、また協力してもらったことがどのように幼児の生活に反映されるかが次第にあいまいにな



ってきます。取り組みをはじめたときの原点を忘れると、協力してもらって当たり前という態度になります。そのことがかえって信頼関係を損なうことにもなりかねません。この事例のように、常に謙虚な気持ちで原点に戻るように心掛けたいものです。

家庭の協力を得たときには、その家庭に感謝を伝えることはもちろんですが、協力できなかった家

庭への配慮も忘れてはなりません。特に、幼稚園に来てもらって協力してもらうような場合には、来たくてもいろいろな事情から来られない家庭もあることに配慮すべきです。そのことがまた、次の信頼と理解を得ることにつながるのです。

(4) 子育ての楽しさをともに

最近の都市化や少子化、あるいは育児情報の氾濫によって幼児をもつ保護者が不安やあせりを覚えたり、幼児との接し方に戸惑いを覚えたりしていることも多いようです。このような不安などは、幼児の成長する自然な姿に触れたり、自分の子供だけでなく他の幼児に接したり、また他の人々と話し合うことなどによって、自然に解消され、親としての自信が生まれてくるものです。

今、私の一番嬉しいこと、それは「おかあさーん」と言って甘えてくる4歳のH男と過ごすことです。先日、H男が一枚の白い紙に〇〇マンを描いていました。表を描き終わると、裏返してまた〇〇マンを描いています。でも目とか鼻は描いていないのです。「H男くん、こっちには目や鼻は描かないの?」と、私が言うと、「ちがうよ。これは後ろ姿なの!」なるほど——と感心してしまいました。なんと一枚の紙の表と裏を使って立体的に描いていたのです。幼稚園に入る前は、丸さえもうまく描けなかったのに。自分の子供の成長ぶりに、驚いたり喜ばせてもらったり、大事なことを気付かされたり発見したり、本当に子育てって楽しいものだと思います。

これはある幼稚園の4歳児の母親の感想文ですが、親として子どもの成長を精神的に余裕をもって見つめられるようになっていく姿があふれています。子どもの発想や行動を成長の表れとして理解できるようになるまでには、きっといろいろなことがあったに違いありません。しかし、それがとらえられるようになると、親としての喜びが実感として感じられるようになるのでしょう。

子供の成長を見つめ、そこに適切にかかわることができることは、親の願いでもあります。うまくいくときもあれば、失敗するときもあります。こうした経験を積み重ねながら、次第に子供に適切にかかわっていくことができるようになります。その過程は、誰もがたどるものであり、近道はありません。

幼稚園としても率先して、保護者の子育てに対する不安を解消し、自信を生み出していくための様々な機会を設けていきたいものです。

例えば、保育参観や行事のときに保護者に参加してもらうことはどの幼稚園でも行われていますが、そこをもう一歩進んで、日常の保育の一部を保護者に担当してもら

第2章 実際に連携を進めるために

う保育参加の試みを行っている幼稚園もあります。保護者に絵本の読み聞かせをしてもらうなど、積極的に幼稚園の保育に参加してもらい、参加した保護者からどうすれば子供たちが喜ぶか分かったと好評を博したといます。また、木工や楽器の演奏など保護者にも楽しめることには、積極的に参加してもらうこともできます。ときには保育の一部について保護者とともに企画し、一緒に展開してみることもよいでしょう。このように、幼児と一緒に幼稚園生活を楽しむことによって、保護者は自然に子育てのために必要な体験を積み、自信を身に付けていくことができるのです。

こうした努力はまた、幼児の経験を広げるよい機会にもなるでしょう。家族の人が来てくれること自体が幼児にとって楽しく心の温まるよい環境です。しかしそれだけに、教師は家族が来てくれなかった幼児の気持ちも理解して大切にしていかなければならないでしょう。

(5) 保護者同士の広がりへ

保護者が失敗を繰り返しながらも、子供に前向きにかかわっていけるようになるためには、それを認め励ましてくれる人の存在も大事です。その意味で、幼稚園の教師自身も保護者の温かい理解者であることを心掛けたいものですが、同じような過程を歩んでいる保護者との触れ合いもまた重要です。お互いに話を聞いたり、悩みを打ち明け合ったりすることにより、次第に不安が消え、自分の進むべき方向が見えてきます。また、自分なりのかかわり方を人に話すことは、自分自身の育児を振り返ることにもなるでしょう。

同じクラスの保護者でも、すでに何人かの子供を育てている育児経験の豊富な保護者もいれば、はじめての子を不安に思いながら育てている保護者もいます。また、子育てのことについて身近に相談のできる人のいる家庭もあれば、まったくそういう人のいない家庭もあります。このような様々な保護者が互いに悩みを打ち明けたり、相談相手になれるよう、幼稚園が関係づくりや場づくりを進めていくことは大きな意義があるでしょう。幼稚園がいわゆる井戸端会議の場になることです。

このような交流の場を作り出していくのは基本的には保護者自身の問題ですが、必要な場合には幼稚園側が積極的な役割を果たすことが期待されます。はじめは保護者が自発的に作り出したものでなくても、交流の楽しさや喜びを体験できるような場に

4. 家庭と子育ての楽しさを共有する

参加しているうちに自分たち自身で場をもとうという気持ちになることが多いようです。

保護者が相互に交流するきっかけづくりとしては、日常的な保育の中での機会を生かしていく場合と、幼稚園側が意図的に機会を設ける場合があります。日常的な機会を生かす例としては、保護者が子どものことや育児のことについて悩みを抱えているとき、「そのことは〇〇さんに相談してみたら」とその悩みについてアドバイスしてくれそうな保護者との交流を促すことなどが考えられます。

意図的な機会としては、保護者の関心のある話題について園長や外部の講師などの話を聞き、その後にそのことについて自由に話し合うことや、行事などにおいて保護者がお互いに交わったり話したりできるような機会を設けることなども考えられます。また、保護者が自由に使える部屋を設け、趣味の会やサークル活動などに使ってもらうこともできるでしょう。更に、園長などと自由に懇談できる日を設定しておき、その日はその部屋に来た保護者同士で気軽に意見を述べ合ったり、育児体験を交流し合うなどの工夫も考えられます。



5. 地域への広がり

(1) 地域を大切に

幼稚園が家庭の信頼を得るためには、さらに目を広げて地域の中での信頼を得るよう努めなければなりません。幼稚園に来る子供たちは、同時に地域の子供でもあります。地域の人々は、みなそれぞれの立場から地域の子供たちを大切に、温かく見守っています。子供たちのために思う者同士としてその地域の人々にも信頼される幼稚園でありたいものです。

幼稚園は、園児のことを考えると同時に、地域の子供たちがいつでも集まって来ることができたり、近所のお年寄りが子供たちの様子を楽しみに見に来てくれたり、修了児が遊びに来たくなったり、地域で子育てをしている人たちからも頼りにされるような幼稚園を目指したいものです。そのように地域のすべての人々に愛され、頼りにされる幼稚園であれば、家庭の信頼も一層厚くなるでしょう。

また、幼児の保育に当たっては、思わぬことで地域の人々の協力を得なければならないことも出てきます。例えば、幼児が迷子になってしまったとき、近所の人たちに問い合わせながら捜すような事態も起こるでしょう。そのようなときも、地域に信頼

される幼稚園であれば、地域の人々が温かく見守っていてくれることが期待できます。



更に、幼稚園が、地域の生活や文化に積極的にかかわることによって、子供たちの生活や活動をより豊かなものにしていくこともできます。例えば、地域の行事や祭り、昔話や歌、遊びなどを園生活の流れに応じて保育の中に取り入れるなどにより、家庭との連携も進み、幼児の生

活はますます充実するでしょう。

地域の人々の理解を得るためには、幼稚園の一人一人の教師が地域の人々との触れ合いを大切に、地域の活動にも積極的に参加していく姿勢が必要になってくるでしょう。また、いうまでもないことですが、幼稚園の樹の落ち葉や飼育している動物の鳴き声が地域の人々の迷惑とならないなど細かい点についても、日頃から配慮しておくことも必要です。

このように、地域の人々との信頼関係を大切に、地域の生活や文化に根ざした幼稚園であることが保育を充実させ、家庭との連携を進めるためにも必要となるのです。

(2) 地域の幼児教育センター的な役割を担う

最近の少子化、都市化、情報化等によって、地域の遊び場が失われたり、地域の子供同士で遊ぶ機会が少なくなったり、幼児を持つ保護者の孤立感や不安が高まるなど、子育てをめぐる様々な問題が生じています。そのため、幼稚園が家庭や地域に対し一層開かれたものとなり、いわば地域の幼児教育のセンター的な役割を果たすことが期待されています。すなわち、幼稚園を地域に開放して、子育てに取り組んでいる家庭をいろいろな形で支援したり、地域の子供たちに遊びの場や機会を提供したりすることによって、地域全体の教育力を高めるよう努めていきたいものです。

その場合、地域にある教育、福祉、医療に関するいろいろな機関と連携・協力し合っていくことが望まれます。幼児のことについて疑問が生じたり、保護者から相談をもちかけられたとき、必要に応じていつでも問い合わせたり、紹介できる機関をもっていることは、幼稚園と保護者の双方にとって大変に心強いことです。逆にそれらの機関から協力、応援を求められた場合にはこれに応ずることも必要です。それが地域の子育て機能を高めていき、幼児のために生きた支援システムとして機能していくことにもなるのです。特に、障害を持つ幼児や外国からの幼児をめぐる場合は、このような協力関係の一環として連携を図りながら取り組んでいくことが期待されています。

幼稚園が地域の幼児教育のセンター的な役割を果たすために行う活動の内容としては、次のようなことが考えられますが、幼稚園と地域の実情に応じてどのようなことが適当か、また実現可能かをよく検討した上で取り組んでいくようにしたいものです。また、その際には、教職員の負担に対する配慮や事故の場合の保障などについての条件整

第2章 実際に連携を進めるために

備が必要です。

○ 子育ての悩みを相談する場として

幼稚園は保護者が子供についての日常的な相談や悩みをもちより、気軽に相談する場として実質的な機能を果たしていますが、その機能を地域の他の人々にも広げ、様々な方法で地域の相談に応じていくことが望まれます。子育ての悩みや不安の多くは、親身に聞いてもらい、共感されることだけでやわらげられるものであり、また、保護者同士の経験の交換によって解決できることも多いものです。幼稚園は、その気持ちを常に温かく受け止め、親としての成長をやさしく見守る場であることによって十分に家庭の教育力の向上に役立てることができるでしょう。

しかし、相談の中には、プライバシーの問題など、専門的な力量を求められる場合もあるので、慎重に対応していく必要があります。特に、難しい問題にぶつかった場合には、地域の他の専門機関を紹介することも考えたいものです。

○ 子育てについて啓発する場として

幼稚園は、幼児に対しての教育を行う場であるばかりでなく、保護者と教師が学び合う場として大切な意味をもっていることは、これまで述べてきたとおりです。そのために幼稚園では、子育てについての講演会や映画会を開くなど、様々な学習の機会を工夫しています。そうした機会を幼稚園だけのものにするのではなく広く地域の人々にも公開し、地域全体の人々が子育てについて共に学び合える場とすることが期待されています。

E 幼稚園の門に毎年一回「こども動物園」の看板がかかる。これは、地域の実情から普段はあまり動物に触れることのない園児たちのために、専門機関に依頼して行う行事である。

この日は、園庭のいろいろな場所に柵が置かれ、その中にアヒル、モルモット、ウサギ、ヤギなど幼児が親しみやすい動物が放される。専門の指導員の指導を受けながら、幼児と教師が一緒になって動物に餌をやったり、抱いたりして過ごすのである。

この「動物園」は、園児のためだけでなく、園児の家族や地域の人々にも開放されているのが特徴である。就園前の幼児を連れた人々が動物たちとの触れ合いを楽

しみながらお互いの交流を深める場にもなっている。さらにこの機会にホールを使って開かれるミニ講演会では、動物の子育てや動物と触れ合う際に気を付けることなどについて取り上げ、好評を得ているという。

また、「こども動物園」に参加した地域の人々にパンフレットを配り、様々な催しへの参加を呼び掛けている。

啓発といっても、幼稚園の日常とかけ離れた特別の活動を行って子育てに関する知識を地域の人々に伝えるということではありません。幼稚園で幼児が友達と遊ぶ姿や幼児に対する教師のかかわり方などに地域の人々が触れることを通して、子育ての楽しさや大切さに気付き、一緒に考える場となることができれば、十分であるといえましょう。



幼稚園の教師であっても、子育てについてのすべてを理解しているわけではありません。教師が様々な機会を通して地域の人々と一緒に学ぶ姿勢をもつことが何よりも大切なのではないのでしょうか。

○ 遊びを広げる場として

最近、子供たちが身体を思い切り動かして遊ぶことができる場所が少なくなっています。また、たとえ場所があっても、遊びの方法を知らない、集団で遊ぶ機会がないといった理由で、地域の子供たちの遊びが広がらないことも多いようです。親や地域の若い人々も子供たちに伝える遊びを知らない場合もあります。幼稚園は、地域の子供たちの遊びを広げる機能を積極的に果たしていきたいものです。

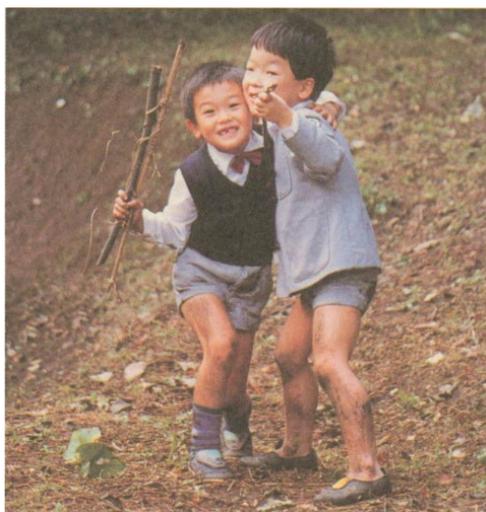
幼児期の遊びを広げるには、家族と一緒に参加する遊びの機会を設けることが現実的でしょう。また、そのことによって親子の触れ合いの機会が増えれば、家庭の活性化にもつながります。例えば、幼稚園での活動に地域の人々に広く参加してもらった

第2章 実際に連携を進めるために

り、親子で何かを作ったり出かけたりする親子学級などを設けることが考えられます。次のような事例があります。

幼稚園の周りには野原や川、森や林など、遊べる自然がまだ残っている。幼稚園の横には川が流れており、以前は地域の子供たちにとって格好の遊び場になっていた。しかし、最近では、子供たちがそこで遊ぶ姿はほとんど見られない。そこでPTAとも連絡を取り合いながら、園児を中心に親子でその川に出かけて行き、メダカ取りなどをして一緒に遊ぶ機会をつくった。そのためか、それ以来、その河原でいろいろな親子が遊ぶ姿が見られるようになった。

遊び体験を広げていく試みが地域全体の活動へと広がっていくためには、幼稚園だけで行うのではなく、PTAや地域の団体などに呼びかけ、地域で取り組んでいこうという姿勢を喚起することも必要でしょう。



また、地域にあまり広場や遊び場がない場合には、子供たちが幼稚園で遊べるようにして欲しいという要望が大きな地域的ニーズとして出てくるでしょう。社会に週休2日制が広まり、学校週5日制も実施される現在においては、幼稚園は、地域の要望に応じて施設を開放することに積極的に取り組む必要があります。

更に、地域の大人が指導者となって、幼児のための活動を実施したいという要望も出てくる場合があります。例えば、園庭を使って親子でのスポーツ活動をしたとか、幼稚園の保育室を使って読み聞かせのサークルをしたとか、様々な要望が考えられます。そのような要望にも、教育に支障がない限り応じてみてはどうでしょうか。

そのような様々な地域の要望に応えることによって、幼稚園は地域の教育力を高めるとともに、地域の人々に一層信頼される幼稚園となることができるでしょう。

5. 地域への広がり



第3章

よりよい連携を実現するための事例

幼児を中心にして、幼稚園と家庭との連携を生み出していくための基本的な考え方や留意点については、すでに述べたとおりです。しかし実際の連携に当たっては様々な柔軟な工夫が必要です。

この章では、こうした基本的な考え方を生かして、家庭と力を合わせて連携を進めたいくつかの事例を紹介します。各幼稚園では、これらをよりよい連携のための手掛かりにしてもらいたいと思います。

なお、これらの事例はあくまでも参考事例ですので、そのままねることのないよう留意してください。



第3章 よりよい連携を実現するための事例

事例1 「お日さま」大好き

【 1月13日 】

M男が家から氷を空き缶に入れて持ってきた。小学生のお兄ちゃんに作ってもらったらしい。ハート形の厚い氷である。学級の友達が「いいな」「どうやって作ったの」とうらやましがっている。「幼稚園にもあるかな」みんなで氷探しが始まる。いろいろな所から氷を集めてきて、大きさを比べたり、太陽に透かしてみたり、容器に入れて溶けていく様子を見たりと、寒さも忘れて遊び込む。

降園の時に、「明日の朝も氷が張っているかもしれないね」と話しておく。

【 1月16日 】

M男をはじめ数人が家で作った氷や道端で見つけた氷を持ってくる。友達や教師に見せているうちに、一人がM男の氷に穴が開いていることに気付く。母親に教わって、ストローで吹いて穴を開けたのだそうだ。

「先生、ストローちょうだい」とたちまち穴開けが大流行。園庭を駆けまわって集めた氷にストローで息を吹きかけて、次々と穴を開けていく。中には穴に糸を通して、手に下げたり、タオル掛けに掛けたりする子も出てくる。キラキラと輝いて美しい。たくさんぶら下げると、氷と氷がぶつかって音が出ることに気付く。「わぁー、きれいな音」「これは細い音だね」「きれい、ひびいているよ」など、いろいろな音があることに気付く。大小様々な形の氷を糸で結んで並べる。

降園時にお迎えの保護者に、子供たちの発見を伝える。皆も口々に今日の氷遊びの感動を話しているようだった。

【 1月20日 】

今朝も寒さが厳しい。家から氷を持って登園する幼児が増える。K子はプリンの空きカップで、花や葉っぱの入った氷を持って来る。家の冷凍庫で作ったという。現代的な発想だ。それぞれの家で氷作りについての話題がでたり、実際に作ったりしているようだ。

降園の時に、親子で容器を選んで園庭のいろいろな所に置いておき、氷の張りやすい場所を見つけてみようかと誘いかけてみる。親子で相談しながら、いろいろな場所に

水の入った容器を置いて帰る。

【 2月5日 】

学級懇談でS男の母親から氷遊びの感想が話された。「ただ遊んでいると思っていたのですが、本当に一生懸命に考えたり、試したりしていろいろ学んでいるんですね。」素朴な話に感激する。T子の母親から、T子が氷の溶けていく様子を見て、“氷がね、お日さま大好きって、お日さまのところに遊びに行くの”とつぶやいていたとの報告がされた。それを受けて親の会の広報部を担当しているK男の母親から、こうした“子どものつぶやき”を集めて次の園だよりに載せてはどうかとの提案がなされた。みんな大賛成。子どもたちの発達していく姿の記録にもなると期待する。

これはM男の家庭での経験が幼稚園の生活に取り入れられていった事例です。幼稚園と家庭がそれぞれの生活の様子を相互に伝え合うことで、幼児の生活全体が豊かになっています。

幼稚園と家庭との連携にはこの事例のような日常的な営みの積み重ねが大切なのです。このようなきめ細かな交流によってお互いの信頼関係が深まり、相互協力が生まれてきます。

幼稚園からの様々な働きかけによって親が幼稚園教育の意味を理解し、家庭での生活の在り方を見直すようになることもあります。また、教師も保護者との触れ合いの中から、大事な保育の手掛かりを得たり、一人一人の幼児を理解するのに必要な情報を得ることができるのです。

第3章 よりよい連携を実現するための事例

事例2 一家族みんなの登園日一

〈 参観日を見直してみる 〉

園の職員会議の中で、毎月行っている参観日を見直してみる必要があるのではという提案がなされた。形式的になっているので少しやり方を変えてみよう、平日だけでなくもっと多くの保護者が参加できる日にしよう、家族全員が参加できるようにしよう、ただ保育を見るだけでなくもっと参加して楽しめるようにしようなど、いろいろな意見が出された。

何度か話し合って検討した結果、次のように変えてみることにした。

- ・各学期に一回は、日曜日に行い、家族が誰でも参加してよい。
- ・その日の内容についてはあらかじめ家庭に知らせるようにする。
- ・参観後は一人一人にアンケートに答えてもらい、それを次回以降の参考に
する。

〈 参観日を工夫してみる 〉

〔 1学期 5月 〕

入園まもないため、4歳児の親や家族の中にはまだ子供たちが日々の保育においてどのように遊んでいるのかをじっくりと見たことがない人がある。また子供たちが遊びの中で成長しているということがまだ理解できない人もいる。

そこで第一回目の日曜参観日に、保護者に保育の中に参加してもらい子供たちの様子を見てもらう計画を立ててみた。参観日の直前にそれぞれのクラスごとに「クラスだより」を出して、子供たちが取り組んでいる遊びの様子を知らせ、そこでどのようなことを経験しているのかなど、遊びを見るときに観点についても伝えておいた。

参観日の当日、思ったより多くの家族の方々が参加した。父母はもちろんのこと、兄弟や祖父母の姿も見えた。はじめは普段どおりの遊びが展開され、そこに参加者が自由に加わった。その後、各クラスに分かれて、年少は親子一緒に歌いながらの手遊び、年長は親子で楽しめるゲームをして楽しく過ごした。

アンケートにどのような声が寄せられるかと心配したが、ほとんどの保護者が子供たちが活発に動き遊んでいることへの驚きや、成長ぶりに対する感想を書いてくれた。

[アンケートの声から]

- ・子供たちは遊びだすまで、ずいぶん部屋や園内をあちこちと歩きまわり、いろいろな場所を見て回ってから、遊びはじめるのですね。(4歳児)
- ・子供たちが何でも遊ぶものにしてしまうのには驚きました。(4歳児)
- ・家にいるときには、身体を動かすのが嫌いになってしまうのでしょうか、絵本を見たり、お絵かきばかりしています。でも園でこれだけ活発に遊んでいたのが安心しました。(5歳児)
- ・子供と一緒に遊んでいると、私も主人もダイエットできそうです。先生方の日頃の大変さがよくわかりました。(5歳児)

このように第一回目の日曜参観日はおおむね好評であり、職員一同ほっとした。

[2学期 11月]

10月の職員会議で2学期の日曜参観日に向けての打ち合わせと意見交換を行った。1学期は子どもたちの遊びの量的な面に対しての感想が多かったが、今では、遊びの質的な面にももっと目を向けて欲しいという意見が多い。そこで、保育への参加と集団遊びの二つに分けないで、ずっと保育に参加してもらいながら、特に遊びの質的な面を理解してもらえるよう工夫することとした。

1学期と同じように、日曜参観日の直前にそれぞれのクラスごとに「クラスだよ」を出して、今、子どもたちがどのような遊びに取り組んでいるのかを伝え、日曜参観日のときには子供たちがどんな所でどのように遊びを展開しているのをじっくりと見て、必要に応じて子供たちを手伝ってもらおうようお願いしておいた。

参観日の当日、前回よりも父親の参加が目立った。中には前の日に親子で話し合ったのか、ダンボールを抱えて子供と一緒に嬉しそうに登園してくる父親の姿も見られた。それぞれのクラスでは、いつもと変わらない環境構成にしておき、教師は特別なことは何もせず、いつもどおりに動くことを心がけた。保育が始まると、はじめのうちはどのように手伝ったらよいのか分からずに戸惑う姿があちこちで見られたが、そのうちにだんだん慣れてきたのか、親子の明るい会話や笑い声が聞こえてきた。しかし、中には、そばで見ているだけでかかわろうとしない人や、かえって先に出しすぎて子供たちから嫌がられている人も見られた。

そしてアンケートには、教師が予想した以上に、遊びの中で子供たちが考える力や

第3章 よりよい連携を実現するための事例

創意工夫する技術を発揮していることへの驚きが数多く寄せられた。

[アンケートの声から]

- ・家ではほとんど何も作らないのに、一生懸命に木片でヒコーキを作っていたのにはびっくりしました。これからは木片を見つけたら、幼稚園に持っていくように心がけます。(4歳児)
- ・いつの間にか大勢の友達の中で遊べるようになっていたので感激しました。でも大人があまり手を出しすぎると嫌がりますね。先生のようにはうまくできませんでした。(4歳児)
- ・先生は子供たちが考えたり工夫して作っていることを本当に大切にしていることが分かりました。子供は自分で風の揚がり具合を見ながら、しっぽの長さを調整していました。見直しました。(5歳児)
- ・家では金槌や、鋸、釘などは危険だということで、子供の手の届かない所にしまっています。でも幼稚園では子供たちが自由に使っていました。使い方が上手で、全く危険そうではありませんでした。家でももっといろいろさせてみようと思反省しました。(5歳児)

親のこうした声を読みながら、家庭で家族が子供と一緒に遊んだり、作ったりすることが本当に少ないのだということを知り、教師一同そんなきっかけづくりができたことを喜んだ。

[3学期 1月]

職員会議で、二つの事項について申し合わせた。一つは、日曜参観日を親子で一緒に取り組むことの喜びと大切さを体験できるようなものにするものである。もう一つは、日曜参観日の計画を立てる段階からもっと保護者に参加してもらうことである。そのため各クラスの保護者の中から委員を出してもらい、幼稚園の教師と一緒に計画を立てた。日曜参観ではどのようなことをしてみたいかをアンケート調査し、参観日の遊びや歌などを選んだり、その進め方について検討した。そして、その結果を、その都度、それぞれのクラスだよりに載せて伝えていくとともに、参観日の直前には、今の子供たちの遊びの様子と参観日当日の進め方などを詳しく知らせ楽しく参加できるようにした。

当日はこれまでの努力のかいもあって、各クラスの保護者の委員が中心になって、

凧づくり、竹馬づくり、竹とんぼづくり、こま回し、お手玉など、子供たちがそれまでの保育の中での遊びの中から、親子で一緒に作ったり遊んだりできることを自由に選んで取り組んだ。材料はあらかじめ幼稚園で揃えたり、家庭から持ってきてもらったりした。また終わりの頃にはみんなが知っている歌を歌ったり人形劇をしたり、それぞれのクラスごとに委員を中心にして工夫して楽しめる取組みが行われた。

そしてアンケートには、親子で一緒のことに取り組むことにより、これまでになく親子の触れ合いができたという喜びの声が寄せられた。

[アンケートの声から]

- ・子供と一緒に遊ぶことで、自分の幼い日を思い出し、改めて我が子の成長に胸を打たれました。(4歳児)
- ・子供たちと一緒に遊びながら、親同士の話しがはずみ、とても楽しい会でした。これからも、時々、こういう機会を作ってください。(4歳児)
- ・普段は接することのない友達の兄弟や、祖父母たちにも触れて、改めて友達の家族に関心をもったようです。こんどは我が家のおばあちゃんにも参加してもらいます。(5歳児)
- ・父親が凧のことをよく知っていて驚いたようです。日頃はしてもらえないことを経験できて、本当によかったと思います。父親ももっといろいろ教えてあげたいと、得意そうに言っていました。(5歳児)

これは、平日に実施してきた保育参観日が次第に形骸化してきたのを反省し、もっと多くの保護者に楽しんで参加してもらえるように参観日を見直していった事例です。

見直しを進めていく過程では、何度も職員会議の中で話し合うことにより教師間の共通理解を深める努力が行われました。また、その都度、アンケートを取ることで保護者の反応や意見を確かめる努力も行いました。

このような教師間及び保護者との相互理解を深める努力を重ねたことにより、保育参観の目的や意義についての共通理解が次第に形成されていきました。そのことが、保護者が遊ぶ中での子供たちの成長する姿に気付き、教師の役割についても理解が深められたという成果につながったのでしょうか。

第3章 よりよい連携を実現するための事例

事例3 一あせらなくても大丈夫一

恒例の年長の小学校訪問が行われた。もうすぐ1年生という思いを胸いっぱいにくらませている子供たちが、みんな安心して小学校生活に溶け込んで欲しい。この願いを実現するために、地域の小学校の協力で毎年2月頃に計画されている訪問である。はじめて見る小学校の教室や生活の様子に皆の目が吸い寄せられていた。

翌日からの幼稚園は、“1年生ごっこ”の大流行。どの子の心にも小学校への期待が高まっていくのが感じられていた。

しかし、数日が過ぎた頃から、子供たちの中に微妙な変化が見られるようになってきたことを、担任のK教師は見逃さなかった。Y男が何となく落ち着かない。あれほど張り切ってやっていた、“1年生ごっこ”にも入ろうとしない。浮かない顔つきの日が続いている。「ボク、幼稚園の方がいいな」、Y男がふともらした言葉である。Y男ばかりでなくT子やS男の様子も不安定になってきている。なぜだろうか。K教師はこの状態を園長や主任に伝え、注意して見守ってみることにした。

一週間ほどたった頃、K教師はY男の母親と話し合う機会をもった。Y男の様子を伝えて、Y男がいつもの活発さを取り戻すにはどうしたらよいかを一緒に考えたかったのである。しかし、母親の口から出る言葉はY男の入学に関しての様々な不安であった。「Y男はまだ字が書けないのです。」それが母親の不安をつのらせていたのである。学校でY男だけが取り残されるのではないか。教室の中で一人だけ字が書けないで困っているY男の姿が頭に浮かんで、いても立ってもいられないほどであるという。

Y男は、どちらかといえば静かに部屋の中で遊ぶよりも、外で体を動かして飛び回ることが好きな子供である。そんなY男の姿をこれまで母親は「子供は元気が何より」と頼もしく感じていたという。ところが、あの小学校訪問の後、母親同士の会話の中に、「学校に行ったら」という話題が多くなり、その中に「字が書けないと困るのよ」とか「すぐに宿題が出て」などという話が混じってきたのだそうだ。Y男の母親の気持ちが大きく揺れだしたのは、その時以来のようである。毎日勉強させようと決心した母親に、Y男は毎晩字を練習させられることになっていたのである。

K教師はこの話を聞いて、母親のY男に対する深い思いを感じ取るとともに、幼稚園での生活を進めていくためには、家庭との共通理解が不可欠であり、そのための努力を惜しんではならないことを痛感した。小学校入学に向けて、どのような指導を進め

ていくのか、また幼稚園での文字の扱い方をどうしているかなどについて保護者に伝えることが十分でなかったことに気付いたのである。Y男だけでなく他の幼児も同じような原因で不安定になっているのかもしれない。

幼稚園ではこのK教師の報告を基にして、修了までの2か月間に何ができるかを全員で検討した。その一つとして取り上げたのが、“小学校入学のために”を中心とした父母懇談会であった。懇談会には助言者として近隣の小学校の教師を依頼し、日頃、父母が不安に思ったり疑問に思ったりしていたことを自由に出し合える機会にしてみた。

会の中ではY男の母親ばかりでなく、多くの母親から様々な疑問が出された。経験の深い小学校の教師から、1年生の学校生活や授業の進め方について具体的な話を聞き、また、早く字を覚える必要はないという話に参加した母親たちの不安が徐々に薄らいでいった。

「でも一番ほっとしたのは、小学校に自分の子供を入学させたことのあるお母さんから、あせらなくても大丈夫という話が聞けたことです。Y男が入学を楽しみにしている気持ちだけを大事にすればいいんですね。」とY男の母親は晴れ晴れとした表情でK教師に話しかけてくれた。

幼稚園生活から小学校生活へ。この大きな節目は、保護者も幼児も不安やとまどいを感じることも多いときです。この事例は、入学を目前にして揺れ動く親子の様子から、家庭との連携の大切さを痛感し、どの親も子も安心して小学校生活に移行できるように、幼稚園全体で工夫した記録です。

幼稚園と家庭が手を取り合って幼児の育ちを支えていくためには、きめの細かい配慮と努力の積み重ねが必要です。幼稚園の側からすれば、ごく日常的な当たり前の活動であっても、この事例のように親の思わぬ不安の種になることもあるのです。幼児の行動や態度は、保護者の感情や生活態度から影響を受けることが大きいので、保護者に不用な不安を与えることのないよう、気を付けたいものです。

親が安心して子供の育ちを見守ることができるようになるには、同年代の幼児をもつ親同士の支え合いが必要です。この事例では、親同士がお互いの経験や知恵を出し合う場を幼稚園が作り出すことによって母親の不安の解消に成功しています。

第3章 よりよい連携を実現するための事例

事例4 一川も田んぼも保育室一

S幼稚園は新興住宅街に囲まれている。住宅が急増したとはいえ、周囲には田んぼや畑、川や草むらなどの自然が豊かに残されている。しかし、園児の家庭は最近、他の地域から引っ越してきたばかりの家庭が多い。当然、親も子ども、この恵まれた自然環境や地域の人々とのなじみが薄い。

そこでS幼稚園では、幼児が家庭生活でも幼稚園生活でも、地域の自然環境を取り入れた生活ができるようにしたいと考えた。地域の環境を生かすことによって、幼稚園も地域に密着した教育を行うことができるし、家庭とともに幼児の生活を支えることができるのではないだろうかと考えたのである。

また、S幼稚園では、いつも保護者と一緒に保育を作り出すという方針から、保護者から材料や用具などを提供してもらい、それを積極的に活用するよう努めてきた。M男の家庭から提供された洋服地を巻く芯も、T子の母親が集めたプリンカップも、幼児の遊びの絶好の材料として使われる。園ではこのような幼児の姿を「園だより」で紹介したり、降園時に話したりする。どの家庭でも、「これは幼稚園の遊びに使えないかしら」という目でいろいろな物を見るようになってきている。物を通しての家庭の保育参加の姿である。

I男の家は代々この地で生活を営んでいる。I男の父親にとってこの地域の川や田んぼは自分の庭のようなものである。いつごろ、どこに行けばどのような生き物がいるかということに精通している。

三人の子供たちをS幼稚園に通わせたI男の家庭から、毎年5月頃になると、ザリガニ、オタマジャクシ、メダカなどが届けられる。I男の父親が子供たちと一緒に捕まえた水辺の生き物を幼稚園の池に放すためである。

園の池はちょうどその頃から、幼児が釣りをしたり、餌をやったりして、にぎやかになる。幼児は大好きなザリガニを見つけると、網や手で捕まえようとし、中には池に落ちる子もいる。浅いのでそれほど心配ないが、落ちることもまた楽しそうである。こんな子供たちの喜ぶ姿にひかれて、I男の父親は年2、3回行う池の掃除には必ず参加してくれる。その頃になると「先生いつ掃除するの」と気軽に声をかけてくれる。

掃除はI男の父親と職員と子供たちが一緒になってみんなで行う。池の中から出てくるのはコイ、キンギョ、ドジョウ、ザリガニ、メダカなど。大きなコイは2、3年前

に届けてくれたものである。泥んこになりながら、大人も子供もワイワイ、キャーキャーと歓声をあげる。

幼稚園での楽しい経験は幼児の言葉を通してそれぞれの家庭にも伝わっていったらしい。

《I男君のお父さんと探しに行こう》

地域の地理に詳しいI男の父親をリーダーにして、お母さん方が親子でザリガニやオタマジャクシの居場所に出かけることになった。捕まえた生き物は家で飼ったり、幼稚園に持ってきたり。その情報はまた他の人にも伝わる。

《地域の自然を生かすことから》

I男の父親と地域の田んぼや川などに出かけていったことをきっかけに、お母さん方は地域の恵まれた自然環境を生かすようになった。秋のお月見の頃には、声をかけ合ってすすきを取りに行き、12月には木の枝や松ぼっくりを集めてリース(輪飾り)作りをする。こんな生活の中で、母親同士が親しくなり、お互いの子育てについての情報なども気軽に話し合える輪が生まれた。

幼稚園が地域の生活に根ざしていくには、日常的な触れ合いを通して地域の人々とかかわっていくことが基本です。この事例は日頃からの自然なかかわりが、幼稚園と地域とのつながりを深め広げていった事例です。

地域のことをよく知る一人の園児の親の協力を得ることにより、他の幼児や親も地域の自然に触れる楽しさを味わうことができたのです。同時に、幼稚園の教師も家庭の人々も地域の一員として生活する実感をもつことができるようになりました。

日頃から地域と積極的にかかわろうとする園の姿勢が、幼児の豊かな生活と人の輪を生み出す結果となっていったのです。

第3章 よりよい連携を実現するための事例

事例5 ー楽しい声がいっぱいー

〈 これまでのPTA活動を見直してみる 〉

年度末のPTAの反省会のときに、どうもPTAの活動がマンネリ化しているのではないかという意見が出された。特に、毎年行われているPTA主催のバザーは、出しものも決まっていて参加者もだんだん減ってきていることもあり、何とかした方がよいという意見が多く出された。

そこで園長を中心にして保護者側の役員と教師でバザーの在り方について話し合う機会をもった。そこでは次のような意見が出された。

- ・どうしても内容が大人中心になってしまうので、もっと子供たちが参加できるような内容に変えたい。できればもっと大人も子供も一緒になって楽しめる内容にした方がよい。
- ・内容は特別なものとするのではなく、日頃の保育でしていることや子育てに役立つことなどを取り入れてはどうか。
- ・修了児同士がなかなか会う機会がないので、できれば在園児だけでなく、修了児やその家族なども参加して楽しめるようなものにして、親睦会のような性格をもたせるようにしたい。
- ・リサイクルバザーの時間は、子どもたちに負担のかからない時間帯を選んだ方がよい。

〈 子供のための祭りにしよう 〉

こうした意見に基づいて、もっと子供も親も楽しめる会にしたいとの方針が確認され、名称も「子供祭り」と変えて取り組むことになった。

さっそくそれぞれの学級から代表者が選ばれて、「子供祭り」実行委員会が作られた。園長をはじめ、教師も2名ほど委員として加わった。日時の設定やどのような内容にするのか、また誰にどのような方法で手伝ってもらえるのかなどについて、何度か話し合いがもたれた。祭りの内容としては、子供たちも大人も楽しめるものということで、次のようなものを含めることになった。

- ・展示コーナー：子供たちの絵や作品を展示して見てもらう
- ・劇場コーナー：大人が人形劇、紙芝居、コーラスなどをしてみせる

- ・冒険・挑戦コーナー：迷路、輪投げ、竹馬などに挑戦する
- ・製作コーナー：缶ぽっくり、竹トンボ、首かざりなどを作る
- ・ひと休みコーナー：クッキー、綿菓子、焼きそばなどを食べて休憩する
- ・掘り出し物コーナー：手作りの手芸品、リサイクル品などを展示即売する

〈 子供祭りへの取組み 〉

展示については全面的に幼稚園側が準備をすることにし、他のコーナーについては保護者から希望者を募った。また手の空いている人には、手芸品づくりやリサイクル品の準備を手伝ってもらえるよう、図書部屋の一角にそうした作業に使える場を確保した。また前日に、劇場づくり、お菓子づくりや、迷路づくり、竹馬づくりなどをするために、協力してくれる人を募った。

こうして準備は着々と進んでいった。保育の間に、保護者が手芸品を作ったり、コーラスや人形劇を練習する姿も見られ、だんだんと雰囲気も盛り上がっていった。また、この祭りのうわさを聞いた修了児や近隣の人たちも参加したいと希望してきた。

更に、このような雰囲気に刺激されたのか、幼児たちもだんだんと子供祭りを期待するようになり、「綿菓子を買うんだ」とか、「一緒に迷路しようね」というような会話が聞かれるようになった。

〈 みんなのお祭りになる 〉

子供祭りの当日は、天候にも恵まれ大盛況であった。在園児の家族はもちろんのこと、修了児やその兄弟までも遊びに来てくれた。修了児たちは、幼稚園の思い出や学校の様子などを教師にたくさん話したがった。そしてもっと話したいので、また遊びに来ると約束していた。また、準備のときから時々顔を見せていた近隣の人々も見に来てくれた。どのコーナーでも、親子の楽しい会話がはずんでいたが、とくに冒険・挑戦コーナーは行列ができるほどの活況であった。

何よりも教師を喜ばせたのは、そのお祭りの体験が子供の中に生きたものとなったことである。保育の中でも迷路遊びが継続し、それはやがてお化け屋敷ごっこへと発展していった。コーラスのまねをして歌う子たちや、綿菓子などを作ってお店やさんごっこをする子たちなど、お祭りをきっかけにして子供たちの経験はとても豊かになったのである。

幼稚園教育指導資料第2集「家庭との連携を図るために」

指導資料作成協力者（50音順、敬称略）

（職名は平成4年7月10日現在）

家田	タカ子	むらさき幼稚園長（京都府）
岩井	妙子	狭山ひかり幼稚園教諭（埼玉県）
岩内	弘昌	新宿区立市谷小学校長
大場	幸夫	大妻女子大学教授
加藤	貴恵子	園児母親
小竹	凡子	前 岡山市立鹿田幼稚園長
鈴木	富美子	江戸川区立篠崎幼稚園教諭
高橋	浩代	園児母親
野原	明	NHK解説委員
萩原	元昭	群馬大学教授
服部	祥子	大阪教育大学助教授
繁多	進	白百合女子大学教授
藤原	芳子	台東区立根岸幼稚園長
宮下	ちづ子	静岡豊田幼稚園長（静岡県）
吉村	真理子	松山東雲短期大学教授

なお、文部省においては、次の者が本書の編集に当たった。

塩谷	幾雄	文部省初等中等教育局幼稚園課長
野村	睦子	文部省初等中等教育局視学官
平川	幸子	文部省初等中等教育局幼稚園課長補佐
柴崎	正行	文部省初等中等教育局幼稚園課教科調査官
坂本	恭一	文部省初等中等教育局幼稚園課指導係
坂口	浩司	文部省初等中等教育局幼稚園課指導係
橋本	百代	文部省初等中等教育局幼稚園課指導係
野角	計宏	文部省大臣官房政策課長 （前 文部省初等中等教育局幼稚園課長）
小玉	武俊	聖徳大学教授 （前 文部省初等中等教育局幼稚園課幼児教育企画官）
石田	徹	文部省学術国際局国際企画課企画係長 （前 文部省初等中等教育局幼稚園課指導係長）